教科書文庫
4
210
32-1940
2500029790

高等小學國史 上卷

文部省

42957
教科書文庫
4
210
32-1940
25000
29790

教科書文庫
4
210
32-1940
2500029790

廣島大學東校分校圖書之印

高等小學國史 上卷

文部省

登録番号
29790
分類
375.932
M

広島大学図書
2500029790

目錄

神勅
御略系

第一　神代……一
第二　神武天皇の御創業……四
第三　皇大神宮の御創立……九
第四　皇威の發揚……十五
第五　朝鮮半島の服屬と文物の攝取……十九
第六　佛教の傳來と美術工藝の發達……二十三
第七　支那との通交……二十七
第八　大化の改新……三十一
第九　東北地方の開拓と朝鮮半島の形勢……三十六
第十　律令の制定……四十一
第十一　奈良時代の學藝・風俗……四十四
第十二　奈良時代の佛教……五十一
第十三　平安初期の盛世……五十七
第十四　藤原氏の榮華……六十三
第十五　平安時代の文化……六十八

第十六　武士の興起……七十六
第十七　院政……八十二
第十八　平氏の驕奢……八十九
第十九　鎌倉幕府の創設……九十四
第二十　北條氏の政治……百一
第二十一　元寇……百六
第二十二　鎌倉時代の文化……百十二
第二十三　北條氏の滅亡……百二十
第二十四　建武の中興……百二十六
第二十五　吉野の朝廷……百二十九
第二十六　室町幕府の盛時……百三十九
第二十七　室町幕府の衰微……百四十五
第二十八　室町時代の文化……百四十八
第二十九　京都の疲弊……百五十六
第三十　戰國時代の大勢……百六十
第三十一　邦人の海外渡航と西洋人の渡來……百六十七
年表

神勅

豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。さきくませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし。

御略系

- 天照大神
  - 天忍穗耳尊
    - 天津彦彦火瓊瓊杵尊
      - 彦火火出見尊
        - 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊
          - 一 神武天皇
            - 二 綏靖天皇
              - 三 安寧天皇
                - 四 懿德天皇
                - 五 孝昭天皇
                - 六 孝安天皇
                - 七 孝靈天皇
          - 八 孝元天皇
            - 九 開化天皇
              - 一〇 崇神天皇
                - 一一 垂仁天皇
                - 一二 景行天皇
                - 一三 成務天皇
                - 日本武尊
                - 一四 仲哀天皇
          - 一五 應神天皇
            - 一六 仁德天皇
              - 一七 履中天皇
                - 市邊押磐皇子
                - 二四 仁賢天皇
                - 二五 武烈天皇
                - 二三 顯宗天皇
              - 一八 反正天皇
              - 一九 允恭天皇
                - 二〇 安康天皇
                - 二一 雄略天皇
                - 二二 清寧天皇
            - 稚野毛二派皇子
              - 意富富杼王
                - 宇斐王
                - 彦主人王
                - 二六 繼體天皇
                - 二七 安閑天皇
                - 二八 宣化天皇
                - 二九 欽明天皇

- 三〇 敏達天皇
  - 三一 用明天皇
  - 三二 崇峻天皇
  - 三三 推古天皇
  - 押坂彦人大兄皇子
    - 三四 舒明天皇
      - 三八 天智天皇
        - 四一 持統天皇
        - 三九 弘文天皇
        - 四三 元明天皇
        - 施基皇子
          - 四九 光仁天皇
          - 四四 元正天皇
          - 四二 文武天皇
            - 四七 淳仁天皇
            - 舍人親王
            - 草壁皇子
        - 四〇 天武天皇
        - 三五 皇極天皇・齊明天皇
        - 三六 孝德天皇
    - 茅渟王
- 四五 聖武天皇
  - 四六 孝謙天皇・四八 稱德天皇
- 五〇 桓武天皇（押字）
  - 五一 平城天皇（左ヲ長）
  - 五二 嵯峨天皇
  - 五三 淳和天皇
  - 五四 仁明天皇
    - 五五 文德天皇
      - 五六 清和天皇
        - 五七 陽成天皇
    - 五八 光孝天皇
      - 五九 宇多天皇
        - 六〇 醍醐天皇
          - 六一 朱雀天皇
          - 六二 村上天皇

- 六三 冷泉天皇
  - 六五 花山天皇
  - 六七 三條天皇
- 六四 圓融天皇
  - 六六 一條天皇
    - 六八 後一條天皇
    - 六九 後朱雀天皇
      - 七〇 後冷泉天皇
      - 七一 後三條天皇
        - 七二 白河天皇
          - 七三 堀河天皇
- 七四 鳥羽天皇
  - 七五 崇德天皇
  - 七七 後白河天皇
    - 七六 近衛天皇
    - 七八 二條天皇
      - 七九 六條天皇
    - 八〇 高倉天皇
      - 八一 安德天皇
      - 守貞親王
        - 八六 後堀河天皇
          - 八七 四條天皇
      - 八二 後鳥羽天皇
        - 八三 土御門天皇
          - 八八 後嵯峨天皇
        - 八四 順德天皇
          - 八五 仲恭天皇
- 八九 後深草天皇
  - 九二 伏見天皇
    - 九三 後伏見天皇
      - 量仁親王（光嚴院）
        - 興仁王（崇光院）
          - 榮仁親王
        - 彌仁王（後光嚴院）
          - 緒仁王（後圓融院）
    - 九五 花園天皇
- 九〇 龜山天皇
  - 九一 後宇多天皇
    - 九四 後二條天皇
    - 九六 後醍醐天皇
      - 九七 後村上天皇
        - 九八 長慶天皇
        - 九九 後龜山天皇

- 一〇〇 後小松天皇 — 一〇一 稱光天皇
- 貞成親王 — 一〇二 後花園天皇 — 一〇三 後土御門天皇 — 一〇四 後柏原天皇 — 一〇五 後奈良天皇 — 一〇六 正親町天皇
- 誠仁親王 — 一〇七 後陽成天皇 — 一〇八 後水尾天皇
  - 一〇九 明正天皇
  - 一一〇 後光明天皇
  - 一一一 後西天皇
  - 一一二 靈元天皇 — 一一三 東山天皇
    - 一一四 中御門天皇
    - 直仁親王
- 一一五 櫻町天皇
- 一一六 桃園天皇 — 一一七 後櫻町天皇
- 一一八 後桃園天皇
- 典仁親王 — 一一九 光格天皇 — 一二〇 仁孝天皇 — 一二一 孝明天皇 — 一二二 明治天皇 — 一二三 大正天皇
- 一二四 今上天皇 — 明仁親王

第一　神代

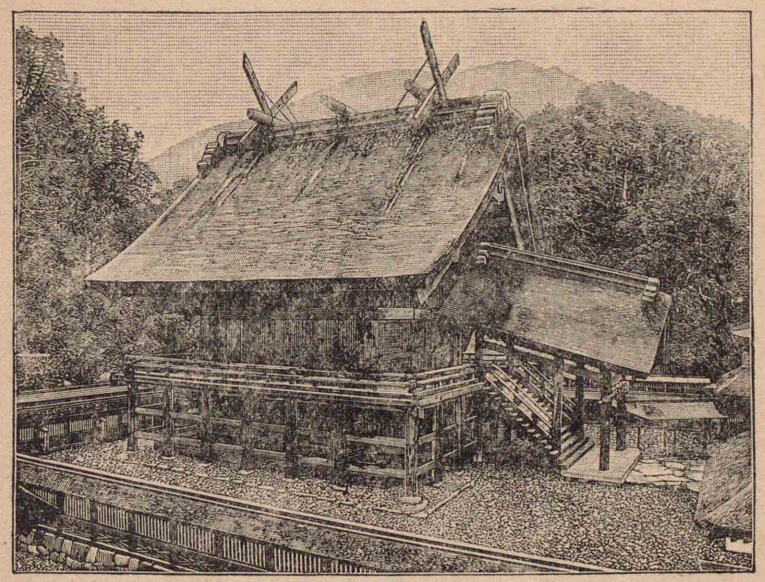
天照大神の御盛德

わが大日本帝國の基は、皇祖天照大神のお定めになつたところである。大神は、伊弉諾尊・伊弉冉尊二柱の神が天下の君としてお生みになつた極めて尊い神であらせられる。大神は、五穀をおつくらせになり、養蠶や機織の道をお授けになつて、萬民を惠み給うた。その御德の廣大なことは、天上に輝く太陽があまねく天地を照らして、萬物を育てあげるさまにもお喩へ申すべきものである。

大國主命の領土獻上

大神の御弟素戔嗚尊は、出雲にお降りになつて、そのあたりをお平げになり、また朝鮮にも往來せられた。その御子大國主命は、更に土地をお開きになり、醫藥の法などを敎へ

て人々をおいつくしみになつたので、その勢威は非常に盛となつて來た。けれども、その他の地方はまだ騷がしかつた。



出雲大社

大神は、御子孫を降して安らかに大八洲國を治めさせようと思し召され、まづ御使を出雲にお遣はしになつて、大國主命にその御旨を諭させ給うた。

命は、直ちに長子の事代主命と御相談になり、つゝ

瓊瓊杵尊が日向にお降りになる神勅

三種の神器

しんで大神の仰に從ひ、領土をことゞく獻上して杵築宮にお退きになつた。後、この宮に命をおまつり申し上げたのが出雲大社である。

大國主命が領土を御獻上になると、大神は御孫瓊瓊杵尊を召されて、

豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。さきくませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし。

との神勅を賜ひ、八咫鏡・八坂瓊曲玉・天叢雲劍の三種の神器をお授けになつて、尊を天降し給うた。わが國體の基は、實にこゝに定まつたのである。尊は神器を奉じ、天兒屋根命・太玉命をはじめ大勢の神々を從へて、日向にお降りになつ

わが國體

た。これから御三代は、この地で國をお統べになつた。世にこれまでを神代と申し上げる。

かやうにわが大日本帝國は、皇祖天照大神の御子孫にまします現御神のお統べになる神國であつて、寶祚は天壤と共に窮りなく、國民また心を一にして世々忠誠を盡くし、皇祖皇宗の御德にこたへ奉り、御稜威のもと、國運は日に月に昌え來つた。實にわが國體は萬邦無比である。

第二　神武天皇の御創業

神勅の御旨を全うしようと思し召し給ふ

瓊瓊杵尊から御代々々は、日向でわが國をお治めになつたので、遠方にはまだ御威德の行屆かぬところがあり、それらの地方は、なか〳〵騷がしかつた。そこで、尊の御曾孫にあらせられる神武天皇は、國の中央に遷つてこれを治め、あまねく萬民を安んじて、皇祖の神勅の御旨を全うしようと思し召され、御みづから軍を率ゐて日向を御出發、海路、大和へ向かはせられた。

大和地方を平げ給ふ

天皇は、軍備を整へて、瀨戸内海を東へお進みになつた。當時は、航路も明らかでなく、舟あしもおそく、交通が極めて不便であつたから、途中の御難儀はひととほりでなかつた。天皇は行く〳〵人民をなつけながら、長い年月を經て、難波にお着きになり、そこから、すぐに大和へおはいりにならうとした。しかるに大和の長髓彦が、饒速日命を奉じて皇軍を妨げ、地の利に乘じて勢がなか〳〵強かつたので、天皇は道をかへて紀伊へおまはりになり、道臣命らの案内で、山谷

をわけ入つて御進軍になつた。時には軍歌をもつて士氣を勵まし、行く〳〵從はないものを平げて、遂に長髓彥のゐる地方へお進みになつた。饒速日命は、すでに大義を辨へ、天皇に從ひ奉らうと思つて長髓彥を諭したが聽かなかつたから、やむを得ずこれを誅し、歸順し奉つた。天皇は、その忠義をお褒めになり、重くお用ひになつた。この他にも、降參したものは皆お許しになつて、大和地方は全く平いだ。

御即位の禮

天皇は、都を畝傍山の東南橿原にさだめて皇居をお造りになり、神器を宮中に奉安して、はじめて御即位の禮をお擧げになつた。この日、宮門を開いて、四方の民に廣く皇位の尊嚴をお示しになつた。また事代主命の御女五十鈴媛命を皇后にお立てになつた。

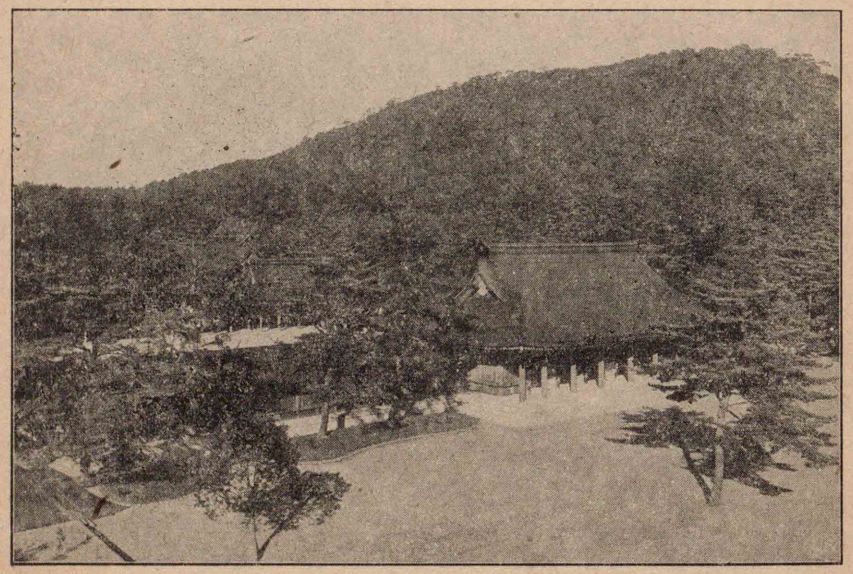
わが國の紀元

この年が、わが國の紀元元年で

ある。わが國の紀元は、第一代の天皇の御即位の年にはじまり、悠久な皇國の發展を象徵するものといふべく、西洋紀元のやうにたゞ年代を現はす爲に用ひられてゐるのではない。

政治を整へ給ふ

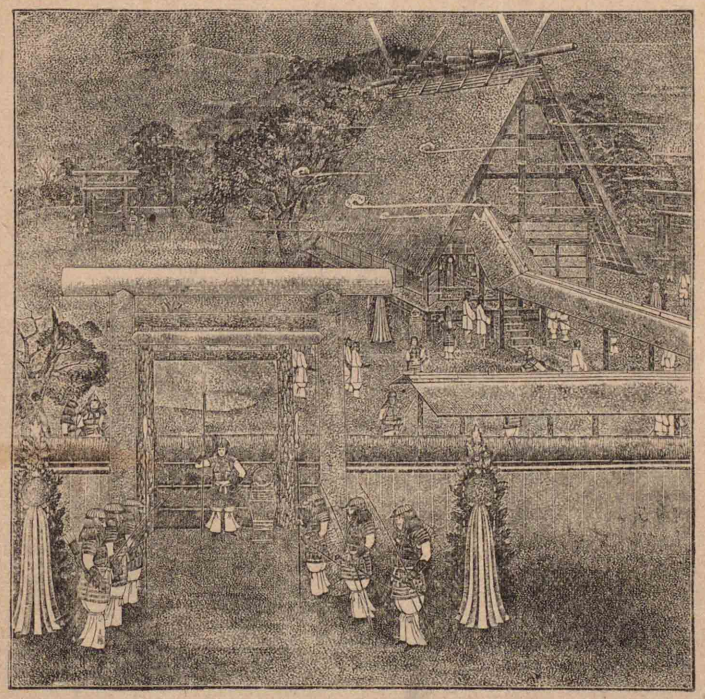
天皇は、天兒屋根命の子孫の中臣氏と、太玉命の子孫の齋部氏にお命じになつて、政治のうちでも、最も大切な祭の事をつかさど



橿原神宮

創業の御盛德

らしめ給ひ、道臣命の子孫の大伴氏と、饒速日命の子孫の物部氏に、兵を率ゐて朝廷を守らしめ給うた。なほ功あるものをあげ用ひて、それぞれ地方を治めさせ、また産業を勸め給うた。かうして神武天皇は、大神がその基をお定めになつたわが大日本帝國を、確固不動のものとなし給うた。その御創業の



神武天皇御卽位の禮

皇祖をあがめさせ給ふ

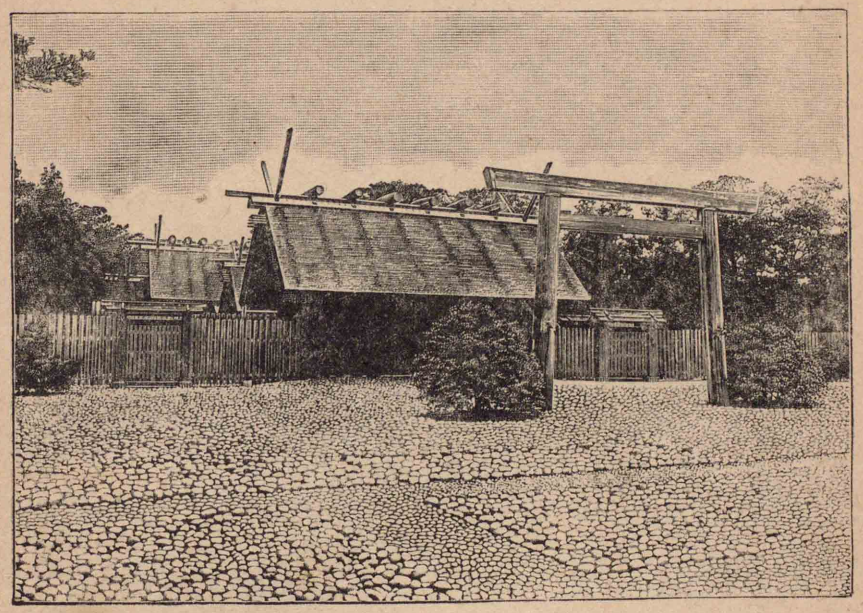
皇大神宮の御創立

御盛德は國民の齊しく仰ぎ奉るところである。

第三　皇大神宮の御創立

天照大神が、八咫鏡を御孫に授け給うて、「此れの鏡は、專ら我が御魂として、吾が前を拜くが如、いつきまつれ、」と仰せられてから御代々々、この御鏡を宮中に奉安してあがめさせ給うた。また神武天皇は、大和に都をおさだめになると、まづ祭場を鳥見の山中に立て、おごそかに皇祖をお祭りになつて、御みづから大孝をお示しになつたので、敬神崇祖の道はいよ〳〵明らかになつた。

その後凡そ五百年、第十代崇神天皇は、いつまでも天照大神の御神體たる御鏡を、宮殿のうちに奉安し奉ることをおそ



熱田神宮

れ多く思し召され、天叢雲劍をそへて新たにお宮を建ててまつらせ給うた。ついで第十一代垂仁天皇の御時、皇女倭姫命は、勅を受けてこれを伊勢に遷し奉り、五十鈴川の清流のほとりに、お宮を建てておまつりになつた。これが皇大神宮である。その後、日本武尊は、蝦夷を御征伐にな

皇大神宮を御崇敬あらせられる

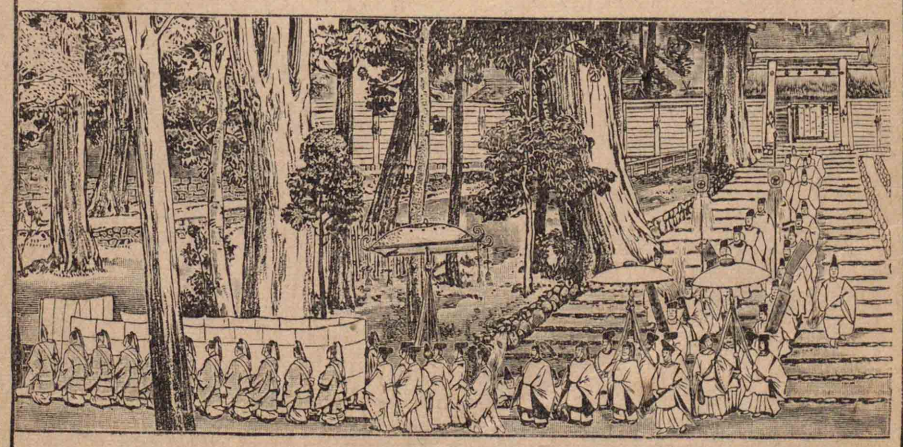
つた折、神宮に參拜して、御叔母倭姫命から天叢雲劍をお受けになり、その御威靈によつて賊の災難を免れ給うたが、御歸途に、これを尾張にお留めになつた。この御劍を草薙劍と申し上げ、熱田神宮におまつり申してある。

朝廷では、あつく皇大神宮をお敬ひになり、永く皇女を齋宮として仕へ奉らせ、今も皇族を祭主に任じて、仕へ奉らせられてゐる。社殿を二十年毎に造り替へて、御遷宮の式を行はせられる定は、今に至るまでかはることがない。また崇神天皇は、御鏡・御劍を新宮におまつりになつた時、新たにそのうつしを造つて、八坂瓊曲玉と共に宮中にお留めになつた。これが、皇位の御しるしとして永くお傳へになる三種の神器である。中でも御鏡は、宮中の賢所に奉安して、

國民生活と固有の文化

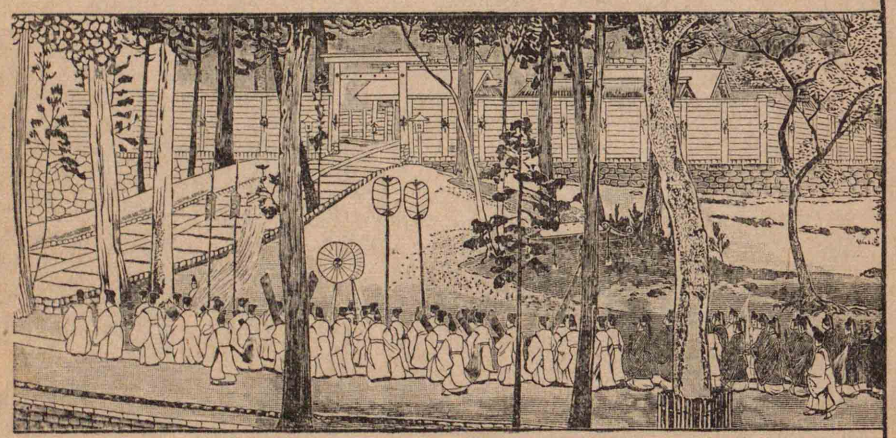
御代々々の天皇は、大神の御膝下におはしますやうに、親しくお仕へあそばされる。

國民もまた皇大神宮を尊崇し奉ると共に、それ〴〵氏神をまつり、敬神崇祖の美風を今日に傳へてゐる。したがつて古い起源をもつ神社建築は、わが國獨特のものであり、世界に誇るべきものである。特に皇大神宮の社殿は、上古の神社建築の風を今に傳へて、簡素の中に無限の神々しさを宿



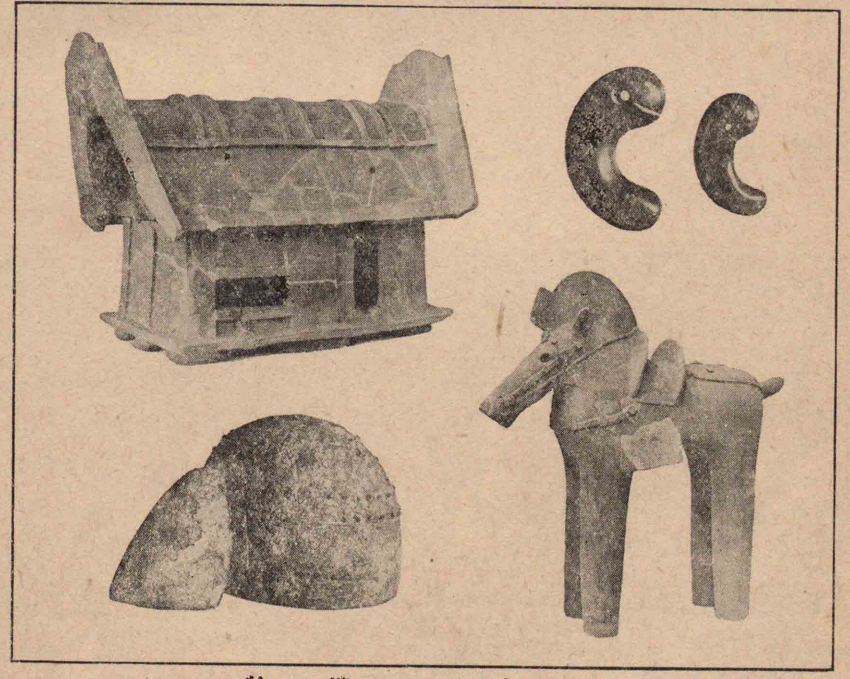
皇大神宮

し、出雲大社は、建築の古い樣式と規模の壯大と相まつて世に有名である。陵墓もまた、上古に於てはおほむね規模が廣大で、こゝにも古來わが國民が忠孝の心に極めて厚く、君親の葬儀をてあつく營んだことが考へられる。中にも前方後圓の古墳は、わが國特有のものであり、美しいその形狀は、周圍の自然とよく調和して、上古の國民のなごやかな心とゆたかな創造力を現してゐる。なほ古



（御遷宮の式）

墳の石室や、これに納めた石棺、曲玉・管玉・鏡・劍・甲冑などの副葬品、埴輪の類は、今も時々見出だされて、上古の文化を知る重要な材料となつてゐる。これらの遺物や更に古い時代に使用された石器などを調べると、その形狀・模樣などに我々の祖先の獨特な



上古の遺物

四道將軍の派遣

工夫と技能がしのばれて、上古に於けるわが國固有の文化の發達を知ることが出來ると共に、當時の國民が主として農業や漁獵を營み、簡素なしかもうるほひのある生活を營んでゐたこともわかるのである。

埴輪の人形

第四　皇威の發揚

崇神天皇の御代の頃、大和地方はすでに安らかであつた

が、遠く離れた國々には、なほ皇威に從はないものがあつた。そこで、朝廷では、皇族の御方々を選んで、北陸・東海・山陰・山陽の四道に、それ〴〵お遣はしになり、これを四道將軍といつた。

將軍は、各地を廻つて、天皇が萬民をお導き下さるありがたき御仁慈の程を說聞かせ、それでもなほ從はないものは、やむを得ずうち平げられた。

さうして、この後も、將軍の御子孫がそれ〴〵その地を治めて、人民をいつくしまれたので、皇威はます〴〵遠方まで行渡つた。

貢物を納めさせ給ふ

四道將軍の派遣以後、地方が開けてゆくにつれ、國費がだんだん增してきた。それで朝廷では、はじめて人口を調べて貢物を納めさせ、男からは獵の獲物を、女からは織物を奉らしめられた。

農業を勸め給ふ

天皇は、また船を造らせて、交通の便利をおはかりになり、また、農は國の大本であると仰せられて、諸國に池を掘らせたり、溝を開かせたりして、大いに農業をお勸めになつた。垂仁天皇もまた、八百餘の池や溝を開いて、水利の便をおはかりになり、農業を盛にし給うた。したがつて人民の生活はゆたかになり、皆太平を樂しみあつた。

熊襲・蝦夷の鎭定

しかし、九州の南部に住んでゐる熊襲と、東北地方にはびこつてゐる蝦夷は、なほたび〴〵反いて世の中を騷がした。そこで、第十二代景行天皇は、御みづから熊襲を御征伐になり、更に御子日本武尊をお遣はしになつて、これを平げさせ給うた。

また武内宿禰を遣はして東北地方の樣子を調べさせ、ついで日本武尊に蝦夷の地を鎭めさせ給うた。尊が連歸

政治がよく整ふ

られた數多の蝦夷人を、諸國に配つて住まはせ、おいたはりになつたので、これらのあら〳〵しいものも、いつとなくなついて忠良な國民となつた。

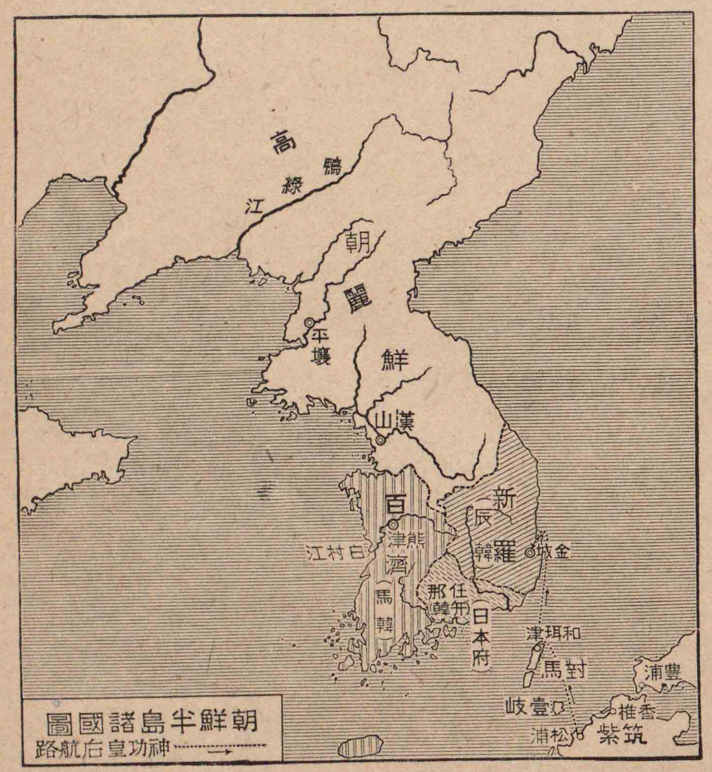
かうして、皇威があまねく國内に行渡つたので、第十三代成務天皇は、專ら政治を整へることに御力をおそゝぎになつた。すなはち、武内宿禰を大臣として朝廷の政治にあづからせ、地方は山川の位置によつて國・縣の境を定め、國造・縣主などを置いて、それ〴〵その地方を治めさせられた。全國はよく治り、國運はいよ〳〵伸びて行つた。

- 孝靈天皇
  - 孝元天皇
    - 大彦命（北陸）―武淳川別命（東海）
    - 開化天皇
      - 崇神天皇
      - 彦坐王―丹波道主命（山陰）
  - 吉備津彦命（山陽）

朝鮮半島との關係

第五　朝鮮半島の服屬と文物の攝取

わが國と朝鮮半島とは、早くから交通が開けてゐたが、天皇の御威德がひろまるにつれて、ますます深い關係を生ずるやうになつた。この頃、半島の北部には高麗の國があり、南部には新



朝鮮半島諸國圖
神功皇后航路

羅・百濟・任那などの諸國があつた。任那は、新羅と百濟にはさまれた小國で、常に新羅におびやかされてゐたので、崇神天皇の御代の末に、わが國に救を求めて來た。朝廷ではその願をいれ、將軍を遣はして鎮めさせられ、任那に日本府を置かれた。

任那の日本府

ついで紀元八百六十年に、神功皇后が新羅王をお降しになると、百濟・高麗の諸國もまた、つぎ〳〵に從ふやうになつたので、以來わが國は任那の日本府を中心として、これらの國々を治めることになつた。さうして、彼の國の貢船は、毎年難波の津に來航した。

學問を取入れる

これらの國々には、支那の學問や工藝が早くから傳はつてゐたので、半島との往來がしげくなるにつれて、わが國はこれらを取入れることとなつた。

第十五代　應神天皇の御代に、

百濟の博士王仁がお召しにあづかつて渡來し、論語などの書籍を奉つた。皇子菟道稚郎子は、王仁について漢學を學び、たいそう御精通になつたので、後に高麗から朝廷に奉つた書に、無禮な辭があつたのを見つけ給うて、非常にその使をおしかりになつたことがある。また阿知使主も、多くの人々を率ゐて歸化し、その子孫は王仁の子孫と共に文氏といつて、代々朝廷につかへて、記錄のことをつかさどつた。

工藝を取入れる

この後も、多くの學者が半島から渡つて來て、わが國の學問の進歩を助けた。

學問と共に、いろ〳〵の工藝も取入れられた。同じく應神天皇の御代に、百濟の弓月君が、大勢の人々を連れてわが國に渡來し、專ら機織の業をすゝめた。弓月君の子孫を秦

産業の發達

豐受大神宮

氏といふのはそれが爲である。天皇は更に使を支那に遣はして、機織や裁縫などにすぐれてゐる女工を求めさせられ、ついで、第十六代仁德天皇は、また秦氏を諸國に配つて、ますますこれらの業の發達をおはかりになつたから、第二十一代雄略天皇の御代には、絹布の產出が大いに殖え、その貢物はにはかに增して來た。天皇は、特に御心を產業の發達におそゝぎになり、農業や養蠶の神である豐受大神を伊勢にまつらせ給うた。豐受大神宮と申し上げるのがそれである。また皇后も、桑をつみ蠶をかはせられ、支那から織縫の女工を、百濟から錦織の職工や陶工・畫工などをお招きになつたので、わが國の工藝は、目ざましく進步し、國力の充實を見るに至つた。

文化の發達

佛教の傳來

第六　佛教の傳來と美術・工藝の發達

漢學が傳はつて以來、その仁義・忠孝の教は、わが國古來の道にかなひ、また彼の工藝も、わが國民獨特の技術と調和して、大いに文化の發達を助けた。ところが、また佛教が傳來して、更にさまざまの影響を與へることとなつた。

佛教は、もと印度の釋迦牟尼のはじめた宗教で、支那をへて朝鮮に傳はつたが、紀元一千二百十二年、第二十九代欽明天皇の御代に、百濟王が使を遣はして佛像や經文などを朝廷に奉り、盛に佛の功德を說いた。天皇は、民意を重んじ給うて、佛を祭るべきかどうかと、群臣におはかりになつた。當時、朝廷の政治にあづかるものに大臣と大連があつて、物部尾輿

佛教が盛になる

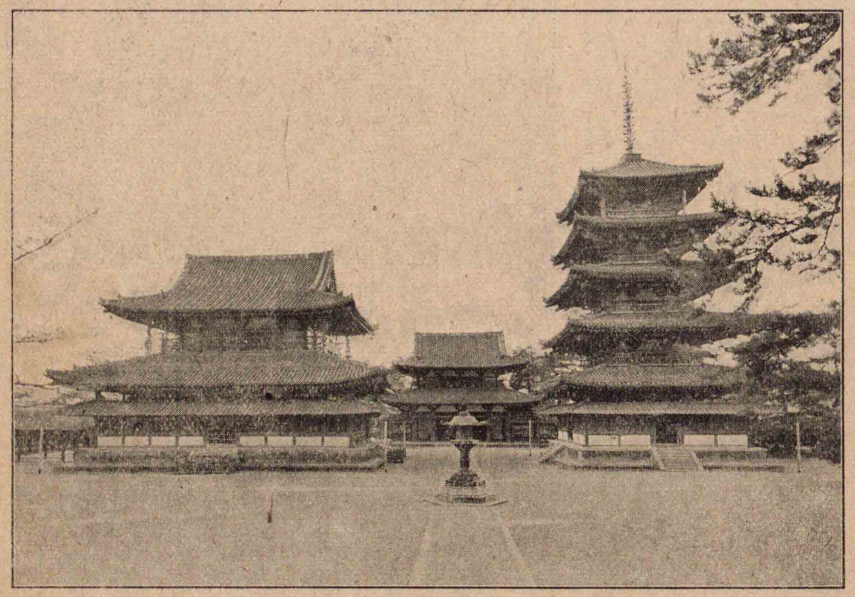
は大連に、武内宿禰の子孫蘇我稲目は大臣に任ぜられてゐたが、稲目はわが國も外國と同じくこれを祭るべきであると唱へ、尾輿はこれに反對して、わが國の神をさしおいて外國の神を拜すべきでないと主張した。そこで天皇は、試みに佛像を稲目に賜はつてこれを祭らせられた。稲目は、自分の家を寺としてこれを禮拜したが、たま〳〵疫病が流行して、死ぬものが多かつたので、尾輿は、わが國の神がお怒りになつた爲であると申し上げて、佛像をすて、寺を燒きはらつてしまつた。

稲目の子の馬子も、また佛を尊び、尾輿の子の守屋は、これに反對して、爭はます〳〵はげしくなり、つひに馬子は守屋を攻滅してしまつた。第三十三代推古天皇の御代になると、聖德

佛教の影響

太子が、深く佛教を御研究になり、これをひろめることに御力をお盡くしになつたので、佛教は忽ち盛になり、寺は四十餘に餘り、僧尼は千餘人の多數になつたといふことである。

佛教は、過去・現在・未來の三世にわたつて、善惡のむくいが絶えず廻つて來るものであると教



法隆寺

美術・工藝の進歩

は、建築・彫刻・繪畫などの技師が大勢渡つて來たので、これらの技術は目ざましい進歩をした。この頃建てられた寺のうちで、聖德太子の建立せられた攝津の四天王寺、大和の法隆寺は最も名高く、取分け法隆寺は、壯麗な堂塔が並び建つへて、人々に深い感動を與へた。さうして寺を建て、佛像を造ることを何よりの功德として、しきりにこれを勸め、一方朝鮮半島から

法隆寺の壁畫

隋との國交

て、その本堂には、鳥佛師の鑄造した釋迦三尊の銅像など、貴重な佛像が安置された。鳥佛師は、佛像を造ることが上手で、わが國に於ける佛工の元祖と仰がれてゐる。また高麗の僧曇徴は、紙・墨・繪具の製法を傳へ、繪畫も大いに發達して、壁に佛畫をゑがくことなどが行はれた。また聖德太子の妃は大勢の女官と共に、下繪の上に五色の糸で美しい刺繡を施された。これらの作品は、今に傳はつてゐるものが多く、これによつて、當時の美術・工藝が、如何に發達してゐたかをうかゞひ知ることが出來る。

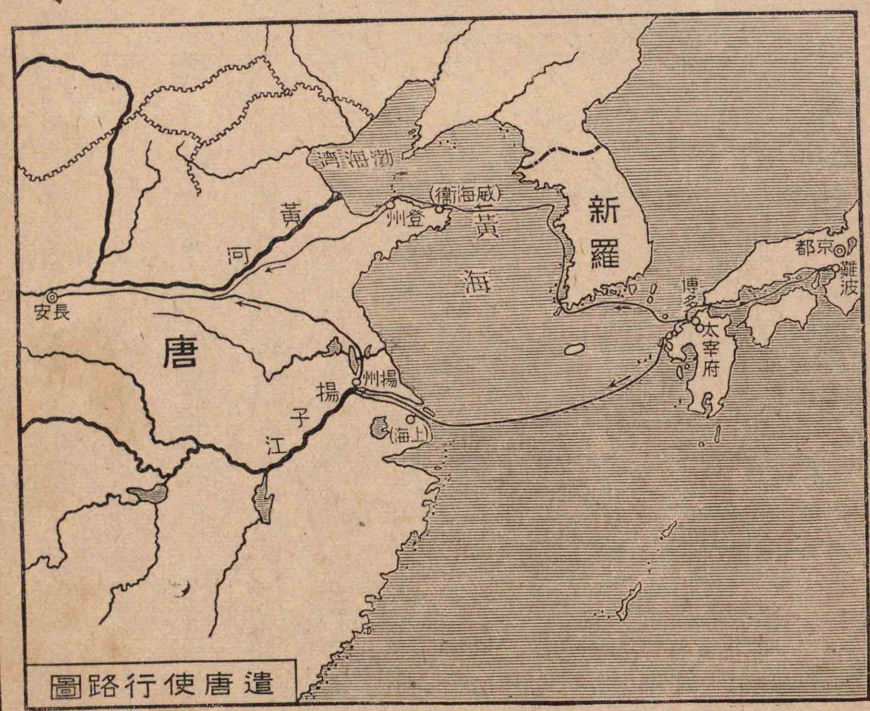
第七　支那との通交

わが國は、これまで支那の文物を、たいてい朝鮮半島をへ

遣唐使唐の都に向かふ

て取入れてゐたが、推古天皇の御代になると、聖德太子は、支那と隣國の好を修めて、直接にその文物を取入れようとお考へになり、小野妹子を彼の地におつかはしになつた。この頃、支那は、長い間亂れてゐたのを、隋が統一して、たいそう威勢があり、まるで他國を屬國のやうにあつかつてゐた。しかし、太子は、どこまでも對等の禮で、國書をお送りになつた。隋王はこれ

を無禮であるとして、大いに怒つたが、わが意氣のさかんなのを見て、翌年、使を妹子に伴なはせて、わが國に送つて來た。朝廷では、難波の津に新館を設けて、その使をてあつくもてなされ、ついで宮廷にお召しになつた。百官が金の華を飾つた冠をかむり、



遣唐使行路圖

綾・錦の禮服を着けて、威儀を正してゐるうちに、天皇は使者に拜謁を仰せつけられ、國書をお受けになつた。やがて、その使者が歸る時、太子は、再び妹子を隋にお遣はしになつたが、その時のわが國書に、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す。」とおしるしになつて、あくまでわが國威をお示しになつた。この後も、太子は常にこの意氣で、彼との交際をつゞけられたのである。

留學生が隋におもむく

遣唐使

妹子が再び隋におもむいた折、高向玄理・南淵請安・僧旻などが、朝廷の御命令を受けて、留學生としてこれに從つて行つた。程なく隋は亡びたが、玄理らはなほ留つて、彼の地の制度・文物を學び、歸朝の後、國政に盡くすところが多かつた。

唐が隋に代つて起ると、第三十四代舒明天皇は、前例にならつて、

使を唐にお遣はしになつた。これから、遣唐使の往復はだんだんしげくなつた。大使・副使以下の職員は、それ〴〵四艘の船に分乘し、萬里の風波をかしてはる〴〵彼の地に渡り、おほむねその使命を果した。さうして、中には特に儀禮にすぐれてゐた爲に、わが國の君子國たる譽を揚げたものもあつた。また遣唐使に從つて學生・僧侶の留學するものも、ます〴〵多くなり、時には數百人にのぼつたことさへあつた。かうして、ほとんど二百年餘りの間、大陸の文物・制度の取るべきものを取入れたので、わが文化は大いに進んだ。

第八　大化の改新

社會組織の弊害

支那大陸の制度・文物が盛に取入れられた頃は、一方わが古來の社會組織に、だん〳〵弊害が起つてきた時であつた。元來、わが國民は氏を以て血筋を區別し、氏毎にそれ〴〵定まつた職業があつて、政治をつかさどる人々をはじめ、いづれも、その職を子孫に傳へる習はしであつた。それ故たとひ才能があつても、その家柄でないと用ひられず、地位が高く勢力のある家は、いつのまにか多くの土地や人民を私有するやうになり、年を重ねるにつれて、ます〳〵わがまゝな振舞がつのつた。中でも、蘇我・物部兩氏は、大臣・大連として、代々朝廷の大政にあづかり、勢力が最も強く、互に權力を爭つてゐたが、たま〳〵佛教が傳はつて來て、その爭がいよいよはげしくなつた。

聖德太子の新政

聖德太子は、これらの弊害をお改めにならうとし、わが國の美風に外國のよいところを取入れて、種々の新しい政治を行はせられた。まづ冠位の制を定めて、冠によつて位の高下を示し、今までの家柄にかゝはることなく、功あるものにこれをお授けになつた。また十七條の憲法を作つて、ねんごろに臣民の守るべき道を敎へ給ひ、殊に、天下の土地・人民は、ことゞく天皇の下に統一せらるべきことを諭して、わが國體を明らかにせられた。

十七條憲法

その後、蘇我馬子の子蝦夷は、ひとり政治上の權力を握つて、わがまゝな振舞が多かつたが、その子入鹿の惡逆は父にもまさり、聖德太子の御子山背大兄王の人望の高いのを憚つて、にはかに兵をさし向けたので、おそれ多くも王は、御一

中大兄皇子が蘇我氏を滅される

遣隋使派遣

族と共に自害し給うた。　舒明天皇の御子、中大兄皇子は、かくも無道な蘇我氏の振舞を見て、非常にお憤りになり、どうかしてこれを除いて、皇威を回復しようと思し召し、藤原鎌足とはかつて、紀元一千三百五年、第三十五代皇極天皇の御代に、とうとう蝦夷・入鹿の父子を誅して、蘇我氏をお滅しになつた。

大化の改新

この年まもなく、第三十六代孝徳天皇が御位にお即きになり、はじめて年號を立てて大化とし、中大兄皇子を皇太子にお立てになつた。　皇太子は、制度や文物にくはしい高向玄理や僧旻などをお用ひになり、鎌足と力を合はせて天皇をたすけ奉り、政治を一新し給うた。　かうして聖徳太子の御志も全うされることとなつたのである。

まづ、これまでの大臣・大連や國造・縣主などが、官職を世襲

大宝律令に依りて整備された、

官制を改め給ふ

土地・人民を收め給ふ

公地公民

田地を分ち授け給ふ

税法を定め給ふ

人材登用

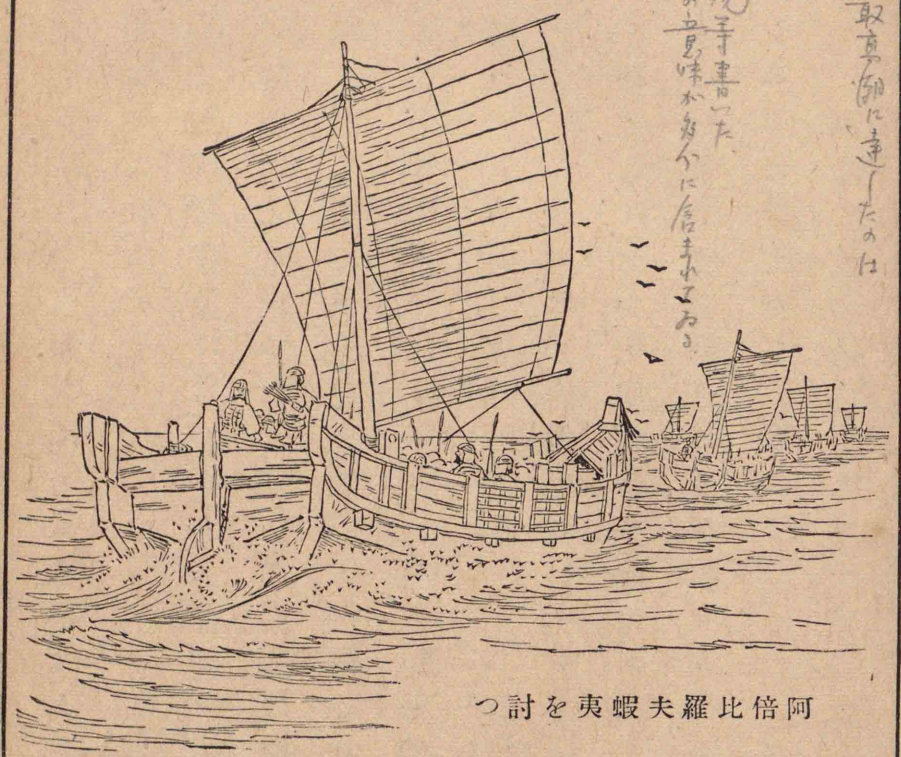
してゐた習はしをやめて、新たに朝廷に内臣・左大臣・右大臣を置き、地方に國司・郡司を置いて、いづれも人々の才能によつてこれに任ずることとせられた。　また、豪族が土地・人民を私有してゐた弊害を改めて、天下の土地・人民を殘らず朝廷にお收めになつた。　かうして、朝廷に收めた全國の土地を、男女を問はず人毎にあまねく分ち授けられ、その人が死ぬと、これを收める法を立て、また租・庸・調の税法を定めて、國家の經濟を立てることとせられた。　租は田地のとりいれの一部を出させ、庸は人民を公役に使ふ代りに米・布などを納めさせ、調は織物その他各地の産物を奉らせるものである。　かやうなことは、まことに國初以來の大改革であつて、これから、天皇の御稜威はいよ〳〵輝き、社會の面目は全く

一新した。これを大化の改新といふ。

第九　東北地方の開拓と朝鮮半島の形勢

大化改新の後まもなく、孝徳天皇は崩御あらせられ、皇極天皇が再び御位にお即きになつた。（第三十七代）齊明（さいめい）天皇と申し上げる。中大兄皇子は、引きつゞいて皇太子として政をおたすけになつた。

これより前、東國の蝦夷は、日本武尊の御征伐の後も、なほ時々反いたので、朝廷では、たび〳〵兵を出してこれを鎮めさせ、歸服（きふく）するものには、或は酒食を賜ひ、或は位を授けて、つとめてこれをなつけ給うた。けれども、日本海の沿岸に住んでゐる越（こし）の蝦夷は、まだ朝廷の御德に從つてゐなかつた



阿倍比羅夫蝦夷を討つ

ので、齊明天皇は、阿倍比羅夫（あべのひらぶ）にこれを討たしめ給ふこととなつた。比羅夫は、兵船百八十艘を率ゐて、三度も勇壯な遠征を行ひ、出羽（では）の海岸から、はるかに北海道に至るまで、これを平定して、各地に郡司を置き、蝦夷人をこれに任

じた。これから、東北地方はおひ〳〵に開けて、皇恩にうるほふやうになつた。

また朝鮮半島では、以前から諸國が互に勢を爭つて、とかく騷が絶えなかつた。中にも新羅は、國力の强いのをたのみとして、常に貢を怠り、無禮の振舞が多く、欽明天皇の御代には、任那を攻滅したので、天皇は軍を遣はして、任那を回復させようとせられたが、とう〳〵そのかひもなくして終つた。この戰に、調伊企儺は敵に捕らへられて、わが將を罵れと强ひられたが、勇武な伊企儺は、かへつて新羅王を大いに罵つたので、忽ち斬り殺された。その妻の大葉子もまた捕らへられたが、

新羅が任那を滅す

朝鮮半島の放棄
王政復古が同時に朝鮮半島の放棄であつたので対外的手段が放棄された
欽明天皇の時代に日本の領土が減ずした

韓國の城の邊に立ちて大葉子は

領布振らすも日本へ向きて

といふ歌を詠んで、故國をしのびなつかしんだ。これを聞くもの一人として惜しみ悲しまないものはなかつた。伊企儺は、歸化人の子孫であるにかゝはらず、かくまで忠烈の志に厚く、その行は妻の眞心と共に、美談として永く後世に傳はつてゐる。

百濟・高麗が亡びる

欽明天皇は、任那の亡びたのを殘念に思し召し、必ず新羅を討つて任那の再興をはかれと、遺詔あらせられたので、御歷代の天皇は、絶えずそれに御苦心になつた。けれども、新羅の勢はます〳〵强く、齊明天皇の御代には、唐の兵の助をかりて百濟を攻め、その王を降參させた。百濟の遺臣は、助を朝廷に願ひ出たので、天皇はこれをお許しになり、御みづ

阿曇比羅夫（九州の航海業者で、当時の海軍の指揮者となつた。）

から皇太子と共に筑前に行幸あらせられ、黒木の御所を朝倉に建てて軍事をお統べになつた。ところで、まもなく天皇は行宮で崩御あらせられたので、皇太子が御位にお即きになつた。第三十八代天智天皇と申し上げる。天皇は、阿曇比羅夫らを遣はして百濟を助けしめ給うたが、百濟はつひに亡び、ついで高麗もまた唐に滅された。以來、新羅はひとり勢を振るひ、やがて百濟・高麗の地を併せて、半島を統一することとなつた。

歸化人をいたはり給ふ

百濟が亡びると、その遺民のわが國に歸化するものが少くなかつた。天皇は、これらにそれ〴〵位を授け、田を賜はつて、おいたはりになつた。また天皇は、時勢をお考へになり、それ以來半島との關係を全く絶ち給ふこととなつた。

大化改新後治の三つの手順が汁垂ちわた、
三大計畫
1、律令の制定＝政治の基本
2、歴史の編纂＝皇室の權威を確立
3、皇都の建設＝天皇親政つたり、御みづから水時計を作つて時刻をはからせたりし給かうて中央集權の表象であつた

天智天皇が内治を整へ給ふ

第十　律令の制定

朝鮮半島との關係は絶えたが、唐は使を送つて再び親密な交際をすることとなり、外交上の心配もなくなつたので、天智天皇は、御心を專ら内治におそゝぎになつた。天皇は、まづ都を近江の大津にお遷しになり、藤原鎌足に種々の法令を定めさせ給うた。その外、はじめて學校をお起しになつたり、御みづから水時計を作つて時刻をはからせたりし給うた。かうして、大化以來の新政を整へ給うたので、後の世に至るまで、永く天皇を中興の英主と尊び奉つてゐる。

大寶律令を定め給ふ

ついで、第四十代天武天皇は、つとめてわが國情にあはせて政治を行はせられ、天智天皇のお定めになつた法令を補ひ給

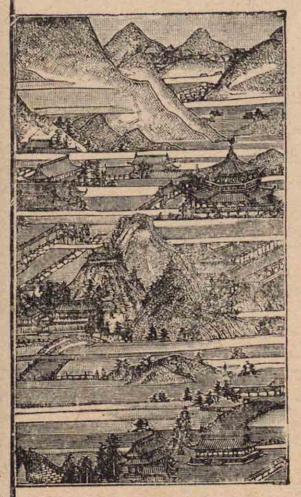
律令の制度

官制

うたが、第四十二代文武天皇は、鎌足の子不比等らに、更にこれを改正せしめ給ひ、紀元一千三百六十一年（大寶元年）に出來上つた。これを大寶律令といつてゐる。律は、今の刑法にあたるものであり、令は、行政に必要な種々の定である。

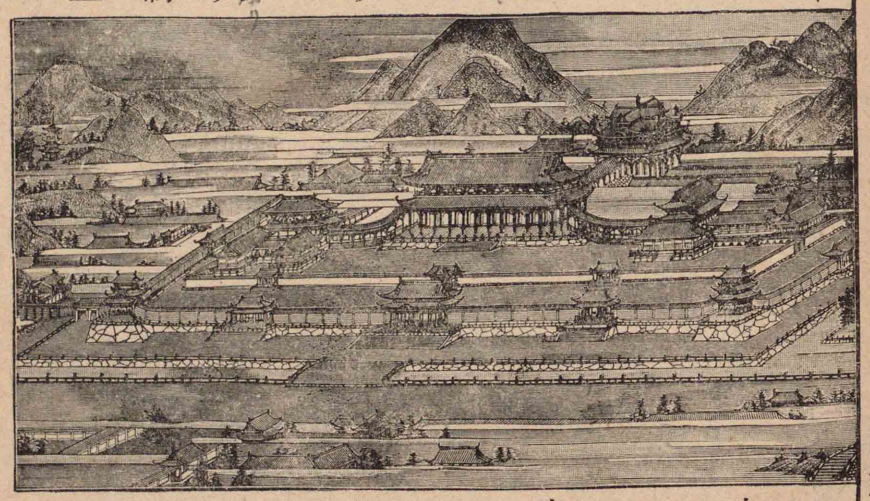
この律令は、わが國古來の美風に基づき、唐の制度を取捨して定めたものであるが、もつぱらこれに倣つた。

すなはち、中央政府に、神祇・太政の二官を設け、神祇官には、神を祭る事をつかさどらせ、これを諸官省の外に獨立させて、わが國古來の敬神の義をあらはし、太政官には、太政大臣・左大臣・右大臣・大納言などの官を置いて政務を統べさせた。中でも、太政大臣は、最も尊い官職で、皇族が任ぜられるのが通例であつた。地方には、國司・郡司を置いて、それ〴〵その部内を治めさせ、西海道は支那・朝鮮に近く、國防にも外交にも、最も大切な所であるから、特に筑前に太宰府を置いて、全道を支配させた。



田制・税法
兵制

また田制・税法を定めて大化以來の制度を固め、徴兵の制をしいて、兵士を全國の男子二十歳以上のものから選び、都の



太宰府

教育

衛府や諸國の軍團に配つて、警備の任務にあたらせた。教育は、都に大學、諸國に國學を設け、歷史・漢學・法律・數學などを授けて、官吏を養成させた。

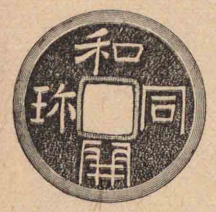
刑罰

なほ刑罰の法も整つて、君父に對して犯した罪を最も重くした。

律令の存續

大寶の律令は、この後社會の變遷に伴なつて、多少の修正を施されたが、その大體は改められることなく、長い間政治の本となつた。

錢を鑄させ給ふ

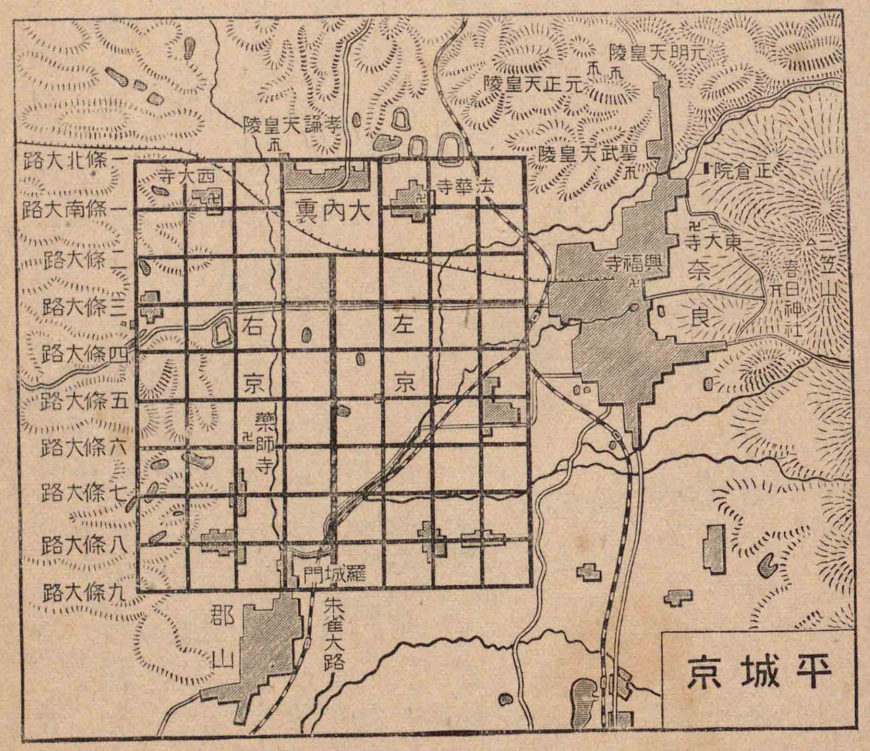


第十一　奈良時代の學藝・風俗

文武天皇が崩御になり、第四十三代元明天皇が御位にお卽きになつた。この御代の初に、武藏の國から銅を奉つたので、天皇は、年號を和銅とお改めになり、錢を鑄させて、しだいに民間に通用させ、物と物とを交換するよりも便利な方法をお敎へになつた。

平城京

天皇は、紀元一千三百七十年(和銅三年)、都を今の奈良市の西にあたる地におさだめになつた。



この都は、平城京と呼ばれて、四方に羅城を廻らし、市街は碁盤の目のやうに正しく、宮殿をはじめ、諸官省の建物などがよく整つて、實に壯大なかまへであつた。これから、御七代七十餘年の間、こゝが都であつたから、世にこの間を奈良時代といふ。

奈良時代

この頃は、大學・國學

學問が進む

阿倍仲麻呂が故郷の空を望む

の教育もますく進み、また唐との交通もしげくなつて、大勢の留學生は、熱心に彼の地の文物を取入れ大いにわが文化を發達させた。

阿倍仲麻呂は、少年の頃唐に渡り、留學してゐる間に、彼の國の大家と詩文を取りかはし大いに文名を揚げた。一度歸朝しようとして、船に乗る時、折から東の空にさしのぼる月をながめて、

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と詠み、望郷の思をのべた。しかし、船は難風にあつて吹きもどされ、仲麻呂はやむなく唐にとゞまつて、高い官に任ぜられ、つひにその地でなくなつた。仲麻呂といつしよに留

學し、ひろく學問を修めた吉備眞備は、歸朝後朝廷につかへて、大學の教育を興し、大いに文化の開發に盡くした。眞備は、功によつて官位がだん〳〵進み、後には右大臣にまでのぼつた。

書籍の編修

學問が進むと共に、種々の書籍も出來た。元明天皇は、太安萬侶に、神代から推古天皇までの歷史をしるして奉らせ給うた。これを古事記といひ、今に傳はつてゐる書物のうちで、最も古いものである。天皇は、また諸國に仰せつけて、國々の傳說や產物などについてしるした風土記といふ書物をお作らせになつた。これはわが國に於ける地理書の始であるが、今に傳はつてゐるのは、僅かに數國のものだけである。

古事記

風土記

また舍人親王・太安萬侶らに命じてお作らせにな

日本書紀

つた日本書紀は第四十四代元正天皇の御代に出來上つた。これは神代から第四十一代持統天皇までの歷史を詳しくしるしたものである。これが先例となつて朝廷では、その後たび〳〵國史を御編修になり、第六十醍醐天皇の御代までに、併せて六部の國史が出來上つた。

舍人親王日本書紀を撰し給ふ

六國史

これを六國史とよんでゐる。

和歌の發達

わが國に漢字が傳はつて以來、文章は專ら漢文が行はれ

たが、だん〳〵漢字の使用になれて來ると、その音と訓とで國語をあらはす方法が考へられるやうになつた。古事記や風土記の中にはこの方法で綴られた文章が多い。かうして、國語をしるすことが容易になるにつれて、和歌も大いに發達し、奈良時代を中心に多くの歌人が出た。柿本人麻呂や山部赤人などは特に名高く、すぐれた歌を萬葉集にとどめてゐる。萬葉集はわが國最古の歌集で、大伴家持の撰したものと傳へられてゐる。この歌集は、上は天皇から下はあらゆる身分の人々の和歌を集めたものである。家持が、第四十五代聖武天皇の御代に、大佛鑄造に用ひる黃金を陸奥から獻上したのを祝つて、

萬葉集

天皇の御代榮えむと東なる

陸奥山に金花さく

と詠んだ有名な歌もこの中に收められてゐる。

奈良の都が非常に賑はふと共に、風俗も昔の質素なのとちがひ、すべて華やかになつた。衣服は、袖の廣い裾の長い優美なものとなり、家屋も、瓦でふき、赤い繪具を塗り、美觀を極めたものとなつた。しかし、地方は、交通もまだ不便であり、開化の程度もひくかつた。

風俗

第十二　奈良時代の佛教

奈良時代に文化の最も盛であつたのは、聖武天皇の御代である。この時、鎌足以來代々朝廷につかへて功を立てた藤原氏から、皇后がお出になる例が開かれ、不比等の女光明

子を皇后にお立てになつた。

佛教の隆盛

天皇は、皇后と共に、深く佛教を御信仰あらせられた。國土の安穩を祈らせ、また萬民の教化をつかさどらせようとの大御心から、勅して、國毎に僧と尼との兩國分寺をお造らせになつた。中にも大和の國分僧寺は、すなはち東大寺で、こゝに大佛を安置して、あがめさせられた。なほ藤原氏の氏寺として建てられた奈良の興福寺は、藤原氏の隆盛につれて、ます〳〵勢を得て來た。かうして、聖德太子以來しだいにひろまつた佛教は、いよ〳〵隆盛を加へた。

國分寺

慈善事業が起る

佛教は慈悲を專らとするから、その信仰が盛になるにつれて、慈善の事業が大いに起つた。光明皇后は、施藥院をお開きになり、諸國から藥草を買取り貧しい病人に施療させられ、また悲田院を設けて孤兒や病人を養育させられた。また和氣清麻呂の姉廣虫は、出家して法均尼といつたが、慈悲の心が深く、數多の棄兒を拾ひ集めて育てあげるなど、いろ〳〵うるはしい行が多かつた。

東大寺の燈籠扉

美術・工藝の進歩

佛教の盛になるに從つて、美術・工藝も大いに進歩した。諸國の國分寺には、堂塔がそびえ立ち、東大寺には、壯大な大佛殿をはじめ諸堂があつて、大佛の外にたくさんの佛像が

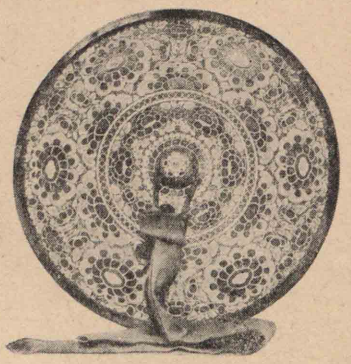
正倉院

天平時代名僧が多く出る

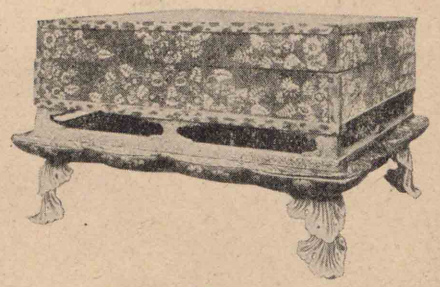
安置された。　また繪畫・織物・染物・漆器などの技術も大いに進み、がらすの製造さへ行はれて、目を驚かす程美麗な品物が作られるやうになつた。　これらは多く、東大寺の境内にある正倉院に、帝室の御物として今に傳はつてゐるが、そのすぐれた技術は、まことに世界にほこるべきものである。

この時代を、當時の年號によつて、天平時代といふ。

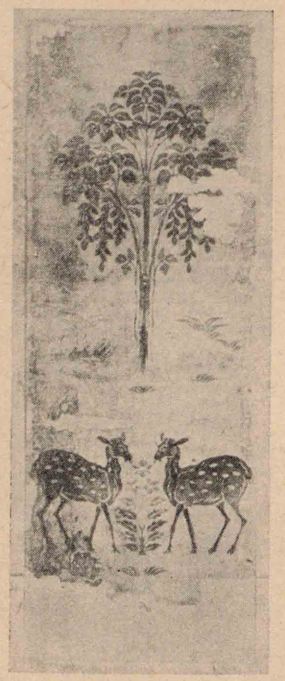
この頃、わが國をしたつて遠く印度や支那から名僧が來朝したが、中でも有名なのは唐の僧鑑眞であつた。　また一方わが國の僧にも、學德のすぐれたものが多かつた。　特に行基はあまねく諸國を廻り歩いて、教をひろめると共に、大いに公益をはかつた。　行基の行くところ、村民はわれ先にと集つて來て禮拜し、行基菩薩といつて尊んだといふこと



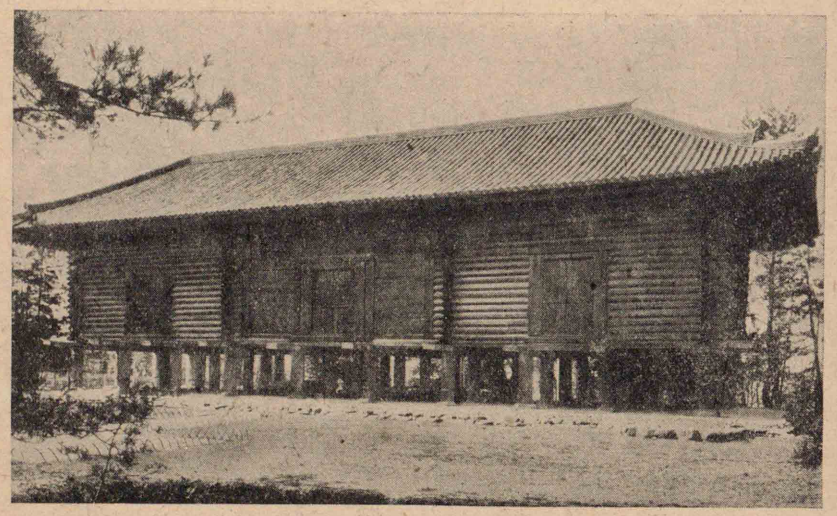
鏡



箱・几



屏風の繪



正倉院

惡い僧もある

である。

しかし、多くの僧の中には惡い者も少くなかつた。取分け道鏡は、（第四十八代）稱德天皇の御代に、勢にまかせてわがまゝな振舞が多く、遂に無道の心を起すに至つたが、和氣清麻呂の忠烈によつて、忽ちくじかれてしまつた。程なく天皇が崩

光仁天皇が政治を改め給ふ

御あらせられて、（第四十九代）光仁天皇がお立ちになると、すぐ道鏡を下野に追ひやり、清麻呂を重くお用ひになつた。天皇は深く政治に御心をおそゝぎになり、取分け財政を整へる爲に御みづから勤儉の範をお示しになつて、とかくゆるみ勝ちな都の人の心を、おひきしめになつた。また貧困の民をおあはれみになつて稅を免じたり、各地の飢饉をお救ひになるなどひたすら民力を養ひ給うた。

第十三　平安初期の盛世

都を京都にさだめ給ふ

光仁天皇についで、（第五十代）桓武天皇が御位にお卽きになつた。天皇は、かねてから都を遷さうとお考へになつてゐたが、今の京都の地が山川も麗しく、その上諸國との往來にも便利なので、紀元一千四百五十四年（延曆十三年）、都をこゝにさだめさせられ、平安京とお名づけになつた。平安京は、平城京のかまへをいつそう大きくしたもので、市街はよく整ひ宮殿は壯麗を極め、皇威のいよ〳〵盛なさまを仰ぐことが出來た。これから凡そ四百年の間、この地が政治の中心となつたので、世にこの間を平安時代といふ。

平安時代

奥羽地方の開拓

この時代の初に至つて、皇威ははるかに奥羽地方にまで

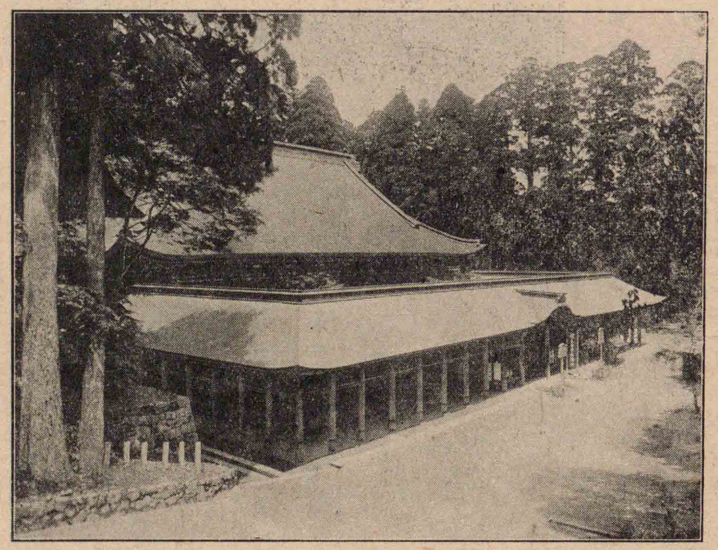
及んだ。さきに阿倍比羅夫の征伐によつて、日本海の海岸地方はいつたん治つたが、太平洋に臨んでゐる地方の蝦夷はたび〳〵反いたので、聖武天皇の御代に、陸奥に多賀城を築いてこれを鎮めさせ給うた。けれども、その地方は、都から遠く離れ、兵糧の運送が困難なばかりでなく、道路がけはしく進軍が容易でないから、これを平げることはなか〳〵出來なかつたが、桓武天皇は、阿知使主の子孫である坂上田村麻呂を征夷大將軍とし、蝦夷を討たせ給うた。田村麻呂は、智勇兼備の名將で、蝦夷地の事情に明かるかつたので、進んでこれを破り、膽澤城を築いて鎮所とした。後にこの城を鎮守府といひ、鎮守府將軍が、こゝにゐて蝦夷を治めたので、これから奥羽地方は全く鎮まつて來た。

征夷大將軍

新しい佛教が起る

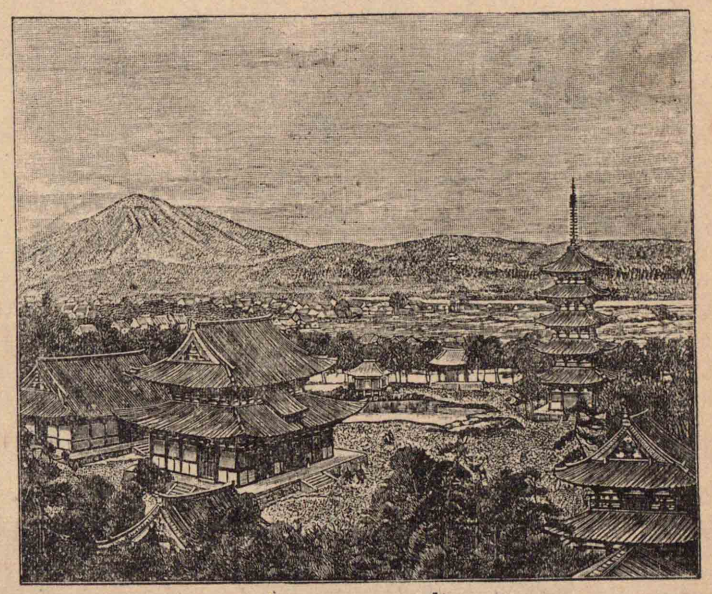
佛教も、この頃に至つて大いに改つた。奈良時代には、都の大寺が互に勢力を爭ひ、わがまゝな僧もあつて、弊害が少くなかつたので、桓武天皇は、これを革新しようとの思召から、最澄・空海の二名僧を選んで、支那にお遣はしになり、新しい佛教を研究させられた。最澄は近江の人で、天皇の御爲に比叡山に延暦寺を建てたが、勅を受けて唐に入り、天台山に學び、歸朝して天台宗

天台宗



延暦寺根本中堂

眞言宗



東寺

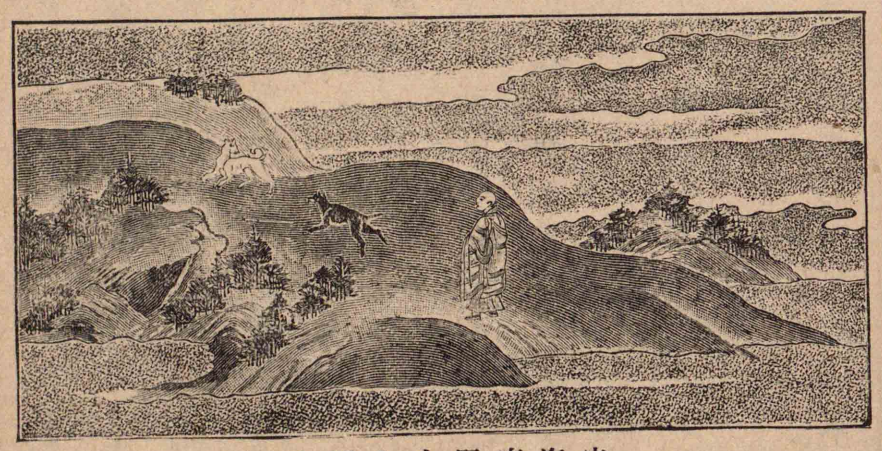
を開き、後に朝廷から傳教大師の諡を賜はつた。空海は、讃岐の人で、最澄と同じく勅を受けて唐に渡り、歸朝の後眞言宗を開いた。

さうして、第五十二代嵯峨天皇の御時、紀伊の高野山に金剛峯寺を建てたが、朝廷からは京都の東寺を賜はり、後に、弘法大師といふ諡をもいたゞいた。この二僧は、いづれも國家の鎭護を念として、よくその敎をひろめたばかりでなく、最澄は數多の名僧を

漢學が盛になる

養成し、空海は學校を設けて、貴賤僧俗の區別なくこれを敎育した。また諸國を廻つて、布敎する間に、最澄は、美濃と信濃の山中に宿舍を建てて、旅人の便利をはかり、空海は、讃岐に萬農池の堤を築いて、農民を救ひなどして、公益を廣め、人々からあつく尊敬せられた。以來この兩宗が專ら世に行はれるやうになつた。

佛敎が盛になるにつれて、漢學もまた大いに興つた。嵯峨天皇



空海高野山を開く

以來數代の天皇は、文學をお好みになつたが、中にも、嵯峨天皇は書道にもすぐれさせられ、空海もまた此の道に秀でてゐた。また當時の貴族は、私立の學校を設けて、めい〳〵その子弟を教育し、官立の大學と同樣に、おもに漢文學を教へたので、漢文學はますます盛になり、小野篁・都良香などの名高い學者がつぎ〳〵に出た。篁は、小野妹子の子孫で、少年の頃は專ら武藝を好んだが、後に志を改めて學業に勵み、遂に一代の學者となつた。或時、嵯峨天皇が、唐の詩人白樂天の詩句の一字を、わざとお改めになつて、これを篁に示し、その文才

嵯峨天皇の御筆

冬嗣が家を興す

をお試しになつた。すると、篁は卽座にこれをたゞし、しかもその字が全く原作と一致したといふことである。良香は詩文にすぐれ、後の世までもその文才をもてはやされてゐる。

かやうに、平安時代の初數代の間は、皇威が最も盛であり、文化も開け、上下ともに〳〵太平を喜び合つた。

第十四　藤原氏の榮華

平安時代の初は、政治がよく整つたが、程なく藤原氏が權力を振るふやうになり、政治はしだいに亂れて行つた。藤原氏は、不比等以來、皇室の外戚となつて榮えたが、冬嗣に至つて更に世にあらはれるやうになつた。冬嗣は、嵯峨天皇

の御信任を受け、藏人頭となつて朝廷の機密にあづかり、後左大臣に進んだ。日頃から同族の保護に力を盡くし、勸學院を建ててその子弟を教育した。冬嗣の女は、第五十四代仁明天皇の后となり、第五十五代文德天皇をお生み申し上げたので、これから同じ藤原氏でも冬嗣の子孫のみが勢力を得るやうになつた。

良房が攝政となる

冬嗣の子良房は、文德天皇の御代に太政大臣に任ぜられた。やがて第五十六代清和天皇が、御年僅かに九歳で御卽位になると、外祖父にあたる良房を攝政として、政治を行はしめ給うた。人臣の身分で、太政大臣となり、攝政となつたのは實にこれが始である。

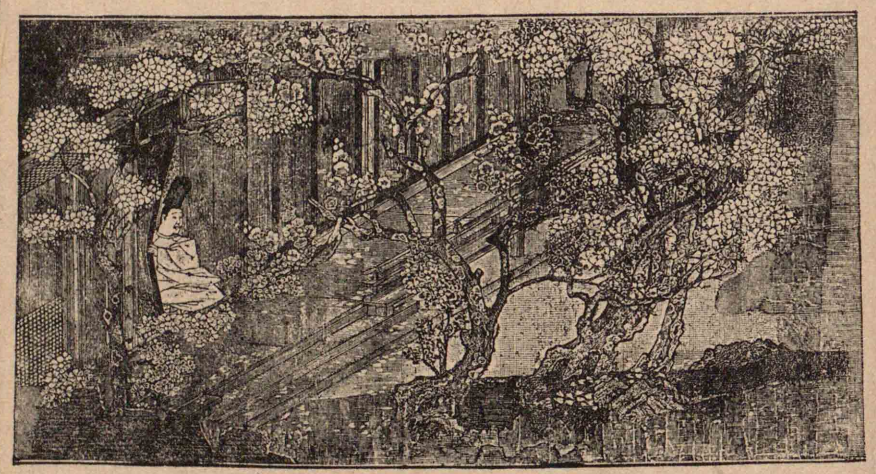
基經が關白となる

ついで、良房の養子基經が政治を執り、藤原氏はますゝ

勢力を得た。第五十九代宇多天皇は、御位にお卽きになつた時、すでに御成年であらせられたので、攝政を置かず特に詔して、政務は大小となく基經に白させ給うた。これが關白の始で、これから、藤原氏は天皇の御幼少にあらせられる間は攝政となり、御成長の後には關白となつて、政治を行ふやうになつた。

菅原道眞が用ひられる

かうして藤原氏は、朝廷の政治を思ふまゝにするやうにな



道眞紅梅殿に梅を愛す

つたので、宇多天皇はたいそう御心配になり、基經が薨じた後は、菅原道眞をお用ひになつて、藤原氏の權力をおさへようとおはかりになつた。　さうして、御位を皇子醍醐天皇にお讓りになると、天皇はやがて道眞を引上げ、基經の子の時平と並んで政治を行はしめ給うた。　しかし道眞は、まもなく時平らにおとしいれられて、太宰府に遷され、とうとうその地で薨じた。

道眞は配所にあつて、日夜文筆を友とし、常に君恩の深きをしのび奉つて、あへて他人を怨まなかつた。　かつて月明の夜、自分の潔白な心を、

海ならずたゝへる水の底までも
清き心は月ぞ照らさん

道長の榮華

莊園

の歌に詠みあらはして、みづから慰めたのであつた。

道眞がしりぞいてから、藤原氏の權勢はいよ〳〵盛となり、道長に至つてその極に達した。　道長は、第六十一代一條天皇の御代以來長く政治にあづかり、三人の女を、相ついで御三代の后に進め奉つて、外戚の權を振るひ、その上數多の莊園を所有して、榮華を極めた。　莊園といふのは、もと別莊園地の意であるが、後には新たに開墾した土地などをも呼ぶやうになつた。　莊園は私有を許されるので、藤原氏をはじめ有力者は、この名義の下に、多くの土地を取入れ、國司の支配を受けず、租稅を納めず、天下の富を私して、憚らなかつたのである。　藤原氏一門の莊園は、道長の頃になると天下にみちて、その富と勢は並ぶものがない有樣であつた。

天兒屋根命…藤原鎌足―不比等―房前…冬嗣
　　―良房―基經―時平
　　―忠平―師輔―兼家―道長―賴通
　　―教通

第十五　平安時代の文化

貴族の生活

藤原氏が權力を振るひ、榮華を極めたので、京都の貴族はいづれもこれにならひ、その生活は實に華美をつくした。

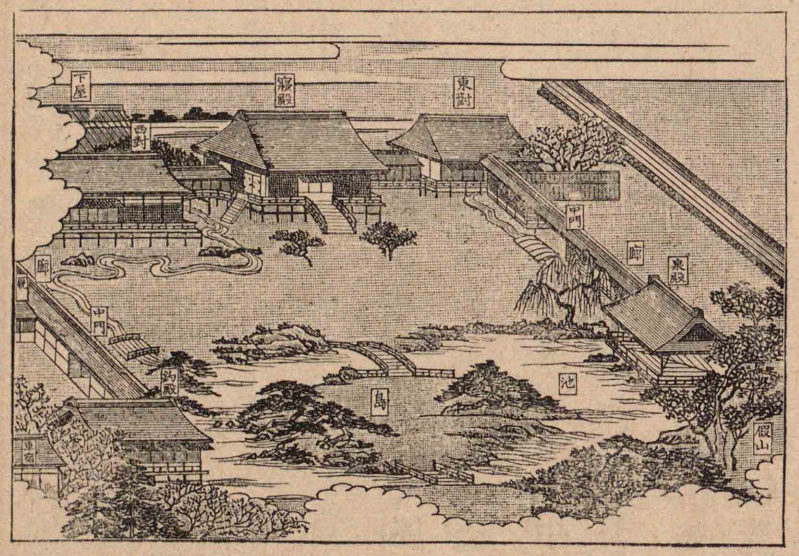
寢殿造

邸宅は寢殿造といひ、殿舍のかまへ、庭園の造も麗しく、中にはは〳〵海水を運んで來て藻塩たく塩竈の風景をうつしたものさへあつた。衣服には四季をり〳〵の意匠をこらし、男子の正裝たる束帶や、女子の正裝たる十二單などは、まことに優美華麗を極めたものであつた。さうして、花の

美術・工藝の進歩

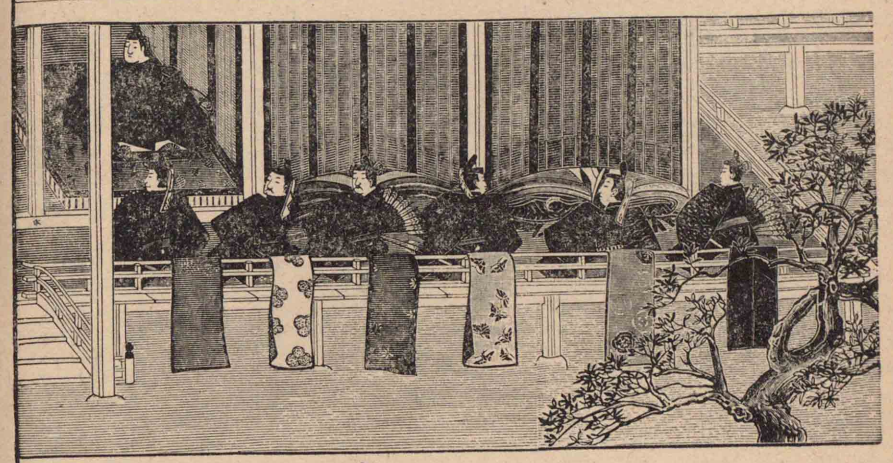
朝、月の夕に、詩歌・管絃の宴を開いて、風流の遊にのみ耽るのが貴族の生活であつた。

佛教の信仰が厚く、特に阿彌陀佛が尊信されたので、その御堂を建てることが貴族によつて行はれた。藤原道長は、法成寺を京都に建て、一代の名工定朝の刻んだ佛像を安置し、道長の子賴通は、宇治川の清流に臨んだ別莊を寺として、平等院と名づけた。法成



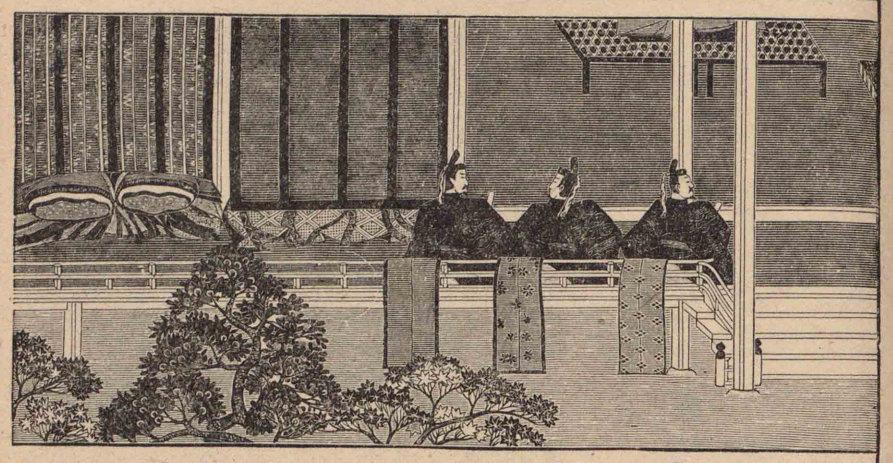
寢殿造

平等院



寺の結構は善美を極め、當時の人目を驚かしたが、後すたれて、今はあとかたも殘してゐない。しかし平等院は、今もなほその一部が保存されて、藤原氏の榮華の名殘を留めてゐる。平等院の佛殿を鳳凰堂といひ、全體の形をあたかも鳥が兩翼を張り尾を引いてゐるやうにしくみ、棟の兩端に立てた金銅造の鳳凰は、風のまに〳〵舞ふしかけで、堂の名もこれから起つたのである。堂内に安置し

漢文學が衰へる



の裝束

た本尊は、定朝の作つた丈六の阿彌陀佛で、壁にゑがいた極樂の繪は、丹青の妙を極めたものである。名高い畫家には、巨勢金岡がある。この人は、宇多天皇の御代、紫宸殿の障子に賢聖の肖像をゑがいて名を揚げた。子孫も代々その業をつぎ、中には非常に佛畫に巧みなものもあつた。

平安時代の初には、唐との交通がなほ行はれてゐたが、宇多天皇の御代の頃に、唐は全く衰へて、内

國立國會圖書館藏

國文學の興隆

鳳凰堂の本尊

亂がつゞいたので、天皇は菅原道眞の意見をお用ひになつて、遣唐使をおやめになつた。これから、使節の派遣が永く絶え、したがつてこれまで盛であつた漢文學がしだいに衰へて、國文學が發達するやうになつた。

これより前、漢字の草體から作られた平假名、漢字の扁または旁から工夫された片假名などが、しだいに行はれて、國

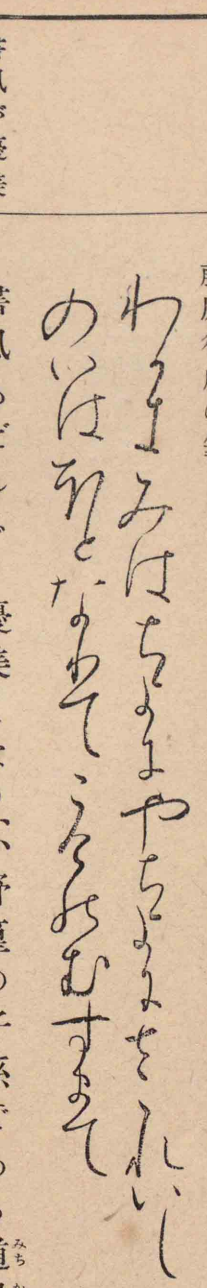
古今和歌集

語を文字にうつすことがたやすくなつたので、國文學が著しく進展するやうになつた。紀貫之は、かつて土佐守となり、任期が滿ちて歸京する時、假名文で日記を綴つた。これを土佐日記といひ、今に殘つてゐる最も古い假名文の紀行である。貫之はまた歌道にすぐれ、醍醐天皇の勅を受けて、萬葉集以後のすぐれた一千餘首の和歌を撰した。これを古今和歌集といふ。この中には、天皇の思召によつて、貫之の作が最も多く收められ、

人はいさこゝろもしらず故郷は
花ぞ昔の香ににほひける

をはじめ一百首に及んでゐる。實にこの集は勅撰和歌集の始で、和歌の勅撰は以後たびたび行はれた。

藤原行成の筆



書風が優美となる

書風もだんぐ優美となり、小野篁の子孫である道風は、藤原佐理と共にこの書風をよくして、無比の能筆といはれた。藤原行成は、才藝の譽が高かつたが、殊に假名がきが上手で、紀貫之と並んでその流が後の世まで傳はつた。

名高い才女があらはれる

假名文字は平易であるから女文字といはれ、おもに女子の間に行はれて、女流の文學を發達させる助となつた。その頃藤原氏の人々は、競つて自分の女を宮中に入れ、文才ある女子を選んで、これが侍女としたので、しぜん女子の學問を勵まし、才學のすぐれたものが多くあらはれた。特に

源氏物語

枕草子

紫式部は、生まれつきはなはださとく、漢文學にも深く通じてゐたが、少しも自分の才學をほこることがなかつた。早く夫に先立たれ、その女を敎養して貞節を守り、後に宮中に召されて上東門院に仕へた。式部のあらはした源氏物語は、當時の上流社會の人情・風俗を寫し、しかも生活の理想をあらはした假名文の物語で、古今の名作として永く世に重んぜられてゐる。また同じく宮中に仕へた淸少納言は、一代の才女として名高く、そのあらはした枕草子も世にまれな名作として、源氏物語と並び稱せられてゐる。この外に、いにしへの奈良の都の八重櫻と詠んで、道長を感心させた伊勢大輔や、まだふみも見ぬ天の橋立と歌つて、公卿を驚かした小式部内侍など、歌文にすぐれた才女が一時に世に出

たことは、實に前後にためしのないことであつた。

第十六　武士の興起

京都で、藤原氏をはじめ朝臣が、太平の夢をむさぼり、政治を顧みなかつた間に、地方は日に月に亂れていつた。すなはち、勢力ある人々の莊園はます〳〵增加して、政府の收入が減じ、これを補ふ爲に、租稅はおひ〳〵重くなつた。その上に、國司は私利をはかり、人民を苦しめることが少くなかつたから、生活に困るものが多くなり、盜賊が所々に起つた。けれども、政府の武備がゆるんでゐて、これを鎭めることが出來なかつた。當時、藤原氏におさへられ都で立身出世の出來ないものは、たいてい國司となつて地方に下つた。さ

地方の政治が亂れる

武士の起

うして、しまひにはその土地に永住して豪族となり、地方の亂れるのにつれて、常に武事を練習し、多くの私兵をたくはへて、みづから衛るやうになつた。これが武士の起である。これから國民皆兵の制度は全く破れて、兵農がしぜんに分れることとなつた。

武士の中で最もあらはれたのは、源平の二氏である。平氏は、桓武天皇の曾孫平高望から出、源氏は、清和天皇の孫源經基から出た。高望は上總の國司となり、一族はその地方に土着して、しだいに東國にはびこつた。第六十代朱雀天皇の御時、高望の孫將門は、同族と爭つて伯父國香を攻め殺し、しきりに近國を侵してつひに謀叛をはかるやうになつた。弟の將平が、順逆の理を說いて諫めたが聞入れず、僞宮を下

東西に亂が起る

總に建てたり、私に文武の百官を任命したりした。朝廷では、將を遣はしてこれを討たせられたが、その到着しない間に、國香の子貞盛が、下野の豪族藤原秀郷と力を合はせて、將門を誅してしまつた。時に天慶三年である。この頃また、藤原純友といふものがあつた。さきに伊豫の國司となり、海賊の追捕を命ぜられたが、かへつて海賊を從へて、瀨戸内海の地方をかすめ、またひそかに兵を京都に遣はして、火を放つて都下を騷がした。そこで天慶四年、經基らは朝廷の命を受けてこれをうち滅した。この東西の亂を天慶の亂といつてゐる。

天慶の亂

この戰功で、貞盛・秀郷・經基らは、それ〴〵鎭守府將軍に任ぜられ、これ以來武士は非常に重んぜられるやうになつた。

源氏は東國で功を立てる

特に源氏は、經基の子滿仲、滿仲の二子頼光・頼信などが藤原氏に信頼せられて功を立て、またたび〳〵盜賊を平げて、勇名をとゞろかした。（第六十八代後一條天皇の御代には、平忠常が上總・下總に據つて反き、しきりに官軍を破つて勢が盛であつたが、頼信は勅を受けてたゞちにこれを平げた。）さらに二十年ばかりたつて、（第七十代後冷泉天皇の御時、）頼信の子頼義は、義家と共に陸奥の安倍氏を滅し、後に義家は、藤原秀郷の子孫清衡と共に、出羽の清原氏の亂を鎭めた。

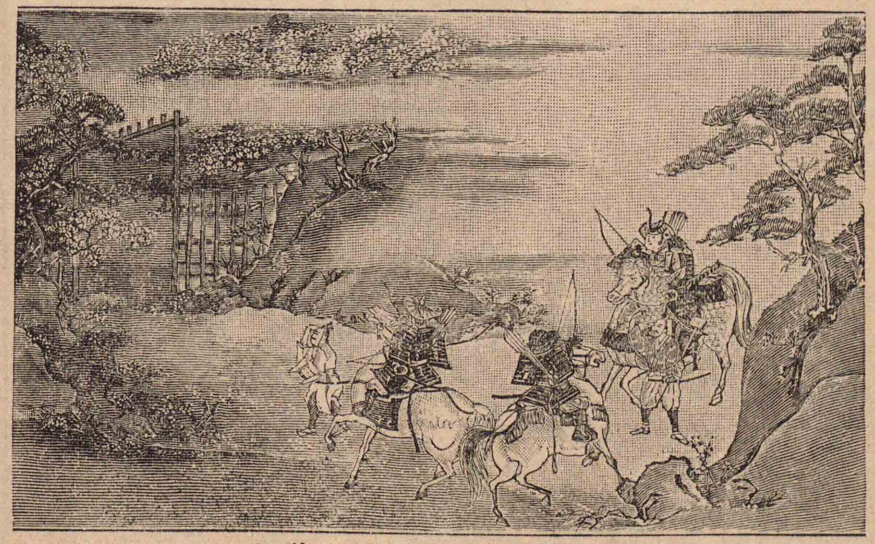
東國の武士が源氏の恩威に服する

かうして、源氏は父子三代相ついで功を東國に立て、大いに武名を揚げた。その上頼義は、慈悲の心深く、よく部下を愛し、みづから陣中を廻つて士卒をいたはつたばかりか、戰の後には、社寺や民家の損害をつぐなつたので、士民は心か

ら賴義になつついた。義家は文雅の道にもすぐれ、陸奥におもむいた時、勿來關を過ぎて花の盛に散るのを見て、

吹く風を
　勿來の關と思へども
道もせに散る
　やま櫻かな

と詠み、今にその雅名を殘してゐる。義家も部下に對して常になさけ深く、陣中寒さに凍えたものを、みづから抱



源義家勿來關に歌を詠む

いて溫めたり、また私財を惜しげもなく分け與へて、將士の戰功をねぎらつたりなどしたので、東國の武士は、いよ〳〵源氏の恩威に服した。後に源氏は幕府を鎌倉に開いて、武家政治をはじめるやうになつたが、その基礎はすでにこの時に出來てゐたのである。

清和天皇―貞純親王―源經基―滿仲―賴光……賴政
賴光―賴信―賴義
賴義―義家
義家―義親
義親―義國
義國―義重（新田氏）
義國―義康（足利氏）
賴義―義光
義家―爲義
爲義―義朝
義朝―義平
義朝―賴朝
義朝―範賴
義朝―義經
義朝―義賢―義仲
義朝―爲朝

第十七　院政

後三條天皇が藤原氏をおさへ給ふ

後冷泉天皇についで、第七十一代後三條天皇が御位にお卽きになつた。御母は、三條天皇の皇女であらせられたので、天皇は少しも藤原氏に憚り給ふことがなかつた。しかも、天皇は剛健な御氣象で、すでに東宮の御時から、關白頼通らのわがまゝな振舞をお憤りになつてゐたので、御位にお卽きになると、大いにこれをおさへようとせられた。

記錄所を設け給ふ

この頃藤原氏をはじめ、貴族や社寺の莊園はいよ〳〵多くなり、その弊害がひどかつたので、天皇ははじめて記錄所を設けて莊園を取調べ、そのうち新たに置いたもの、または證書の明らかでないものを、こと〴〵くおとゞめになつた。

院政の御志

また御みづから御節約になつて、世の奢を戒め給うた。かくて、皇威は再び振るひ、藤原氏はしだいに實權を失ふやうになつた。

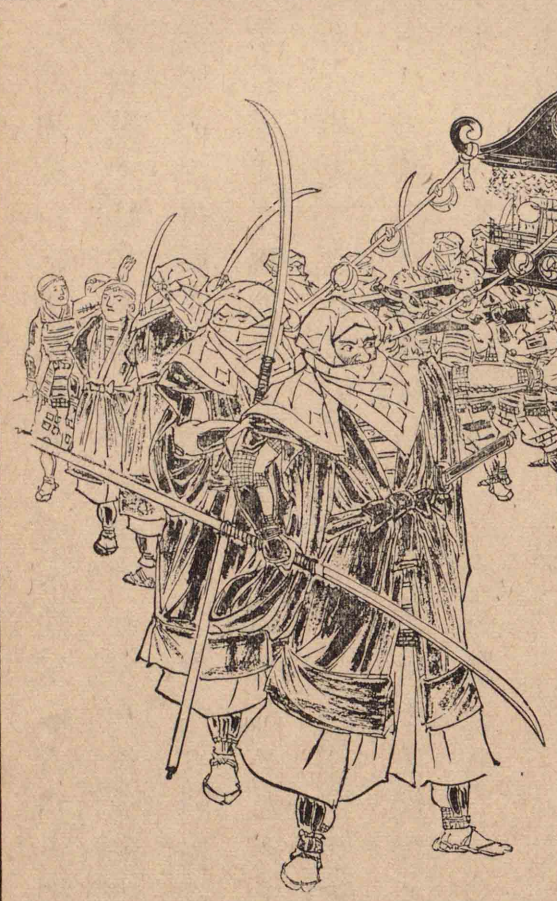
けれども頼通の弟關白教通らは、父祖の餘威によつてなほわがまゝな振舞を改めず、天皇の御心にそむき奉ることも多かつた。そこで天皇は、御位をお退きになつて、院に於て政を聽き、あくまで政權の攝關家に移る弊害を除かうとの思召から、御在位僅かに五年で、御位を皇子の第七十二代白河天皇にお讓りになつた。しかしその後まもなく崩御せられたので、せつかくの御志をお果しになることは出來なかつた。世の人々は皆これを惜しみ申し上げ、ひたすら崩御を痛み奉つた。

院政がはじまる

白河天皇は、御父の御志をついで政を御みづからごらんになり、ついで御位を第七十三代堀河天皇にお讓りになると、上皇としてなほ政を院中でお聽きになつた。こゝに院政の例がはじまり、專ら院宣で天下に御命令あらせられたので、政治の實權は院中に移り、攝政・關白はたゞ名のみとなつて、今まで政權を思ふまゝにした藤原氏は全く勢を失つてしまつた。

僧兵が起る

白河上皇は、深く佛教を御信仰になり、御髮をそつて法皇となり給うた。法皇は御みづからけはしい山路をしのいで、高野や熊野などに十餘度も御參詣になり、しきりに寺や塔を建てさせ、佛像をお造らせになつた。しかるに、當時心がけのよくない者たちが僧となつて諸大寺に集るものが



僧兵大擧して入京す

多く、それらは武藝を練つてつひに僧兵といふ者になつた。さうして比叡山の延曆寺、奈良の興福寺などは、いづれも多くの莊園を所有してゐたから、佛法の保護を名目として、數千の僧兵をたくは

へ、勢力はいよ〳〵強く、しかも法皇のあつい御信仰を受けて増長し、横暴を極めるに至つた。その頃、山法師といへば延暦寺の僧兵を指し、奈良法師といへば興福寺の僧兵を指す有様で、これらの僧兵は互に相爭ひ、また不平があれば、忽ち大擧して京都に亂入し、たび〳〵朝廷に強訴し奉つた。それで法皇は「賀茂川の水、雙六の采、山法師だけは朕の意のまゝにならない。」と仰せられて、お歎きあらせられたほどであつた。

武士の勢が京都に及ぶ

朝臣は柔弱で、僧兵の亂暴をおさへることが出來なかつたから、朝廷は源平の二氏に命じてこれを鎭め、京都を守らしめられた。以來武士の勢力は京都に及び、やがて天下の政權を得る基となつた。

平氏は西國に勢力を占める

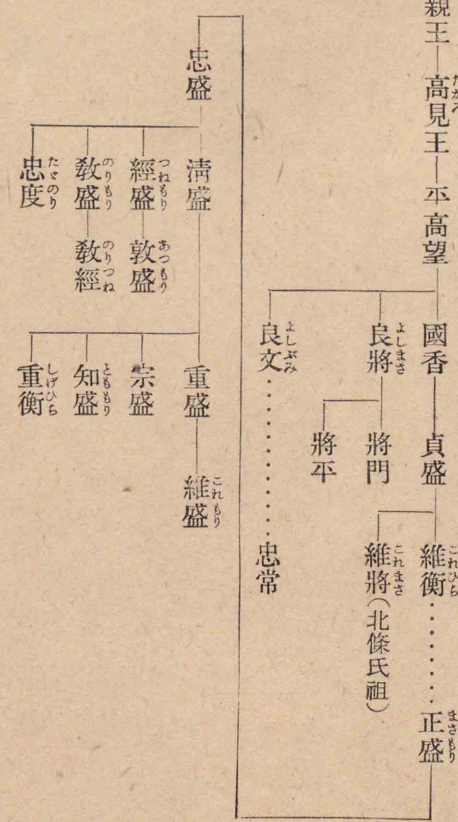
當時京都に召された勇士に平忠盛がある。平氏は、さきに貞盛が將門を滅して武名を揚げ、その一族は伊勢の國にひろがつて、世に伊勢平氏といはれたが、その後やゝ衰へて源氏の勢力に及ばぬところがあつた。しかるに忠盛は、白河・鳥羽の兩上皇につかへて御信任をかうむり、勅を受けて山陽・南海兩道の海賊を討つて功を立て、たび〳〵西國の國司に任ぜられ、つひには朝官にのぼつて、大いに家名をあらはした。以來平氏は西國に勢力を占め、源氏と對立して勢を競ふこととなつた。

源氏が衰へ平氏が勢を得る

たま〳〵保元の亂が起つて源平兩氏がこれに參加し、義家の孫爲義は、子の爲朝らと共に敗北して、源氏の人々は多く殺された。これに反して忠盛の子清盛らは、この亂をを

帝國圖書之印

さめて功が多かつたので、平氏はます〳〵勢を得た。爲義の長子義朝は、この形勢を見て平氏を除かうとはかり、平治の亂を起した。清盛は子の重盛らと共に、これを鎭めて大功を立て、義朝は遂に殺され、その子賴朝は伊豆に流されて、源氏は忽ち衰へ、平氏の勢は朝日の昇るやうに盛になつた。



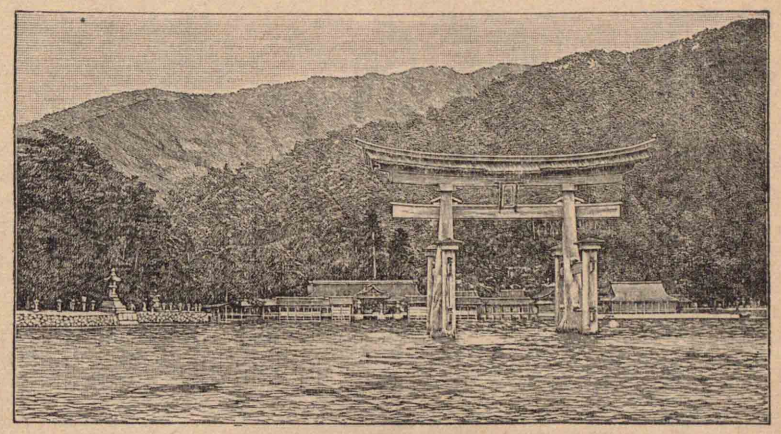
平氏の全盛

第十八　平氏の驕奢

平清盛は、平治の戰功によつて官位が進み、つひには從一位太政大臣となつて、武人としてはじめて政權を握ることとなつた。子の重盛をはじめ、一族皆高官にのぼり、公卿に列するものが十餘人、その他の朝官に任ぜられるものが三十餘人、一門の莊園は全國五百餘箇所にわたつた。清盛は藤原氏の例にならつて、その女の建禮門院を第八十代高倉天皇の皇后に進め奉り、後に皇子第八十一代安德天皇がお立ちになると、皇室の外戚として、藤原氏にも劣らぬ榮華を極めた。かくて清盛は、安藝の嚴島に壯麗な社殿を建て、また攝津の兵庫港を修築して、宋と貿易を營んだことなどがあつた。宋

清盛が宋と貿易を營む

清盛の無道



嚴島神社

とは、さきに唐に代つて支那を統一した國である。

清盛は勢にまかせてわがまゝな行が多かつたので、後白河法皇の近臣らは、ひそかに平氏を滅さうとはかつたが、事あらはれて、或は斬られ或は流された。清盛はなほ法皇をも幽し奉らうとしたが、忠孝の心の厚い重盛の諫によつて、いつたんは思ひとゞまつた。しかし重盛の薨じた後は、憚るところもなく、つひにおそれ多くも法皇を幽し奉り、關白以下

源頼政が兵を擧げる

三十餘人の官職を奪つた。

時に源頼政は、法皇の皇子以仁王を奉じ、令旨を諸國の源氏に傳へて、平氏を滅さうとした。たま〳〵謀がもれて敵兵に襲はれ、宇治に戰つて敗れ、頼政は平等院に入つて自害し、王もまた流矢にあたつて薨じ給うた。

諸國の源氏が起る

頼政の企は失敗に終つたが、久しく諸國にひそんで機會を待つてゐた源氏は、王の令旨をいたゞいて所々に起つた。中にも頼朝は、北條時政の助をかりて伊豆に兵を擧げたが、かねてから源氏に心を寄せてゐた東國の武士が、先を爭つてこれに應じたので、勢は一時に振るつた。源義仲もまた兵を信濃に起して北國を從へた。

清盛の薨去

清盛は大いに驚き、兵をやつて頼朝・義仲を討たせたが、す

平氏の都落

平氏が亡びる

でに都の遊惰の風にしみ込んでゐる平氏は、もろくも敗北して皆逃歸つた。かやうな不安のうちに、清盛は病にかゝつて薨じたが、「頼朝の首を見ないで、死ぬのは何より殘念である。きつと彼の首をとつて、我が墓に供へよ。」と遺言した。

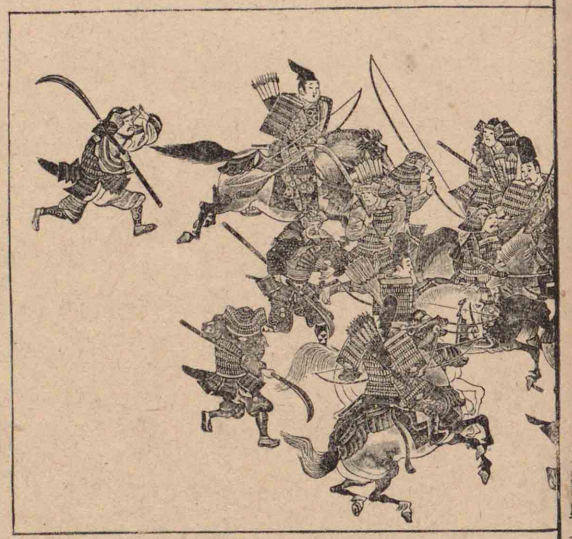
しかし、子の宗盛は臆病者で、義仲が京都に迫ると、これを迎へ討たうともせず、一族と共に、住みなれた都を後に、あわたゞしく西國に落ちて行つた。

義仲は京都に入ると、忽ち功にほこつて法皇の仰にそ

平氏の

高國史上

むき奉り、部下の兵士は、民家をかすめ社寺をあらすなど亂暴を働いたので、頼朝は弟の範頼・義經をやつて、これを討たせた。二人はまづ義仲をうち滅し、その勢で平氏を一谷に破り、ついで義經は、屋島に襲ひ、更に八百餘艘の兵船を率ゐて壇浦に攻めた。平氏は五百餘艘を以て迎へたが、つひに大敗して一門すべて討死した。時に壽永四年三月で、清盛が太政大臣となつてから僅かに十九年、はかなき春の夜の夢にも似て、まことにあはれな末路であつた。



都落

高國史上

第十九　鎌倉幕府の創設

頼朝が鎌倉に據る

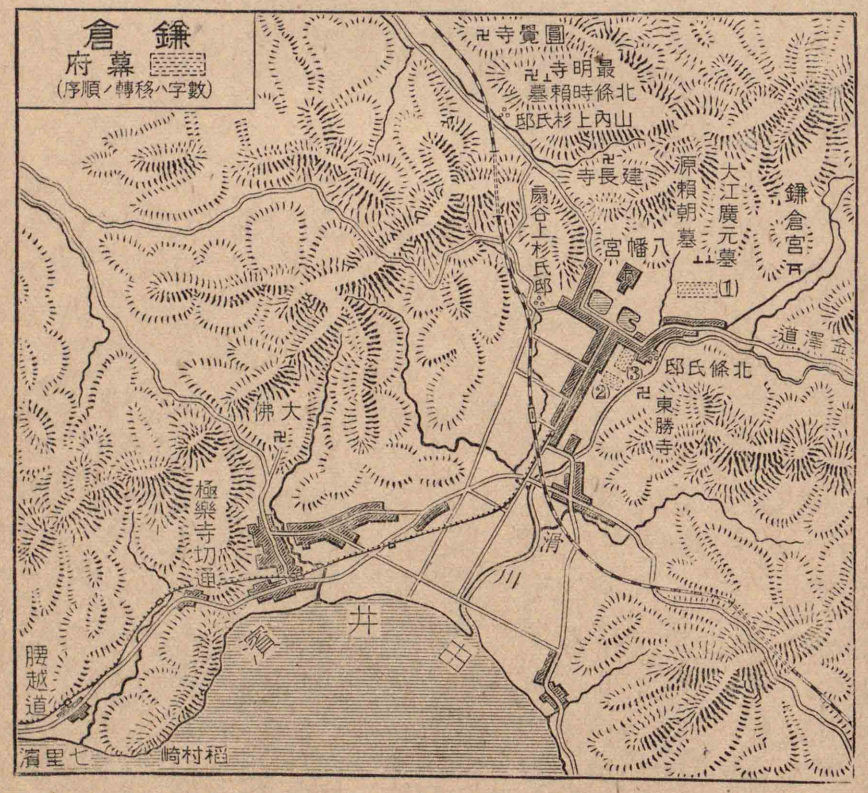
はじめ頼朝は、以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、平氏の將と相模の石橋山に戰つて、いつたん敗れたが、やがて勢を盛返して鎌倉に據つた。　鎌倉は三方山に圍まれ、一方海に臨んだ天然の要害である上に、かつて頼義が八幡宮を建てたことなどがあつて、早くから源氏に緣故の深い地であつた。それ故頼朝は、平氏を富士川に破つた後も、なほ西上を見あはせ、鎌倉に引返して、東國の根據を固めた。　さうして、まづ侍所を置き、和田義盛を長官として武士を取締らせ、ついで政治・法律にくはしい大江廣元・三善康信らを京都から招いて、政所を開き、廣元を長官としてもろ〳〵の政を統べさせ、

鎌倉幕府の基が定まる

問注所を設けて、康信らに訴を聽かせた。　かうして、鎌倉幕府の基がはじめて定まつた。

守護・地頭を置く

そのうち、義經は平氏を滅して大いに武名をあらはした。　頼朝はこれをそねみ、義經が平氏の捕



虜を連れて、鎌倉に入らうとするのを追ひかへし、更に人を京都へやつてその邸を襲はせた。　義經は所々に逃げかくれたが、これをかくまふものもあつて行方が知れず、兵亂のうはさがとり〴〵に起つて、世の中がたいへん騷々しくなつた。　そこで、頼朝は廣元の勸めにより、北條時政をやつて、朝廷に、「今、義經が行方をくらまして、いつ戰亂が起るかも知れませぬから、守護・地頭を置いてあらかじめ謀叛人の出るのを防ぎたいと思ひます。」と、請ひ奉らせた。　朝廷では、やむを得ずこれをお許しになつた。　守護は國毎にあつて、軍事と警察の事をつかさどり、地頭はすべての公領・莊園に置かれて、おもに年貢の取りたてをつかさどる役目である。　頼朝は、自分の部下をそれ〴〵守護・地頭に任じて、みづからこ

奥州を平げる

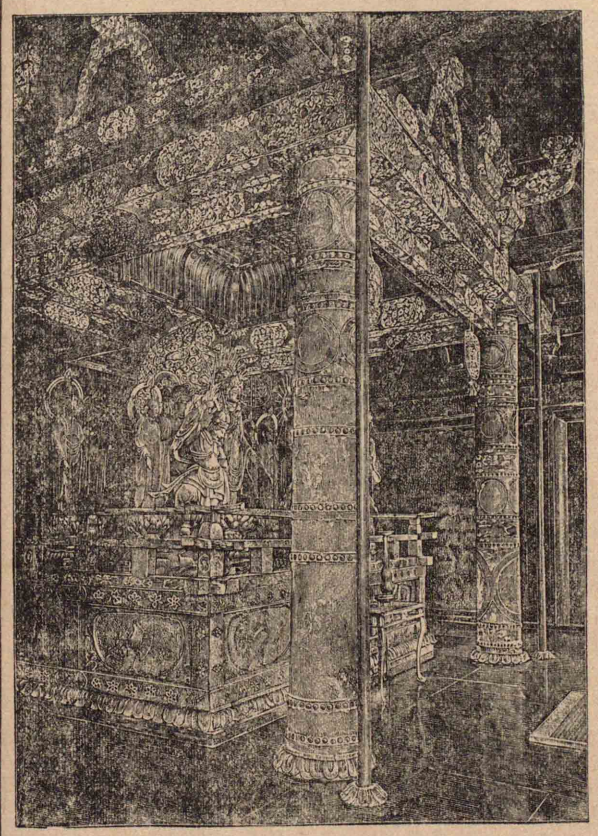
れを統べたので、天下の實權はおのづからその手に歸することとなつた。

かうして頼朝の威勢は、ほとんど全國に行渡つたが、たゞ奥羽は邊鄙で、威令が屆かず、さきに清原氏の亂に功を立てた藤原清衡の子孫が、代々平泉にゐて、大いに勢を振るつてゐた。　義經は、かつて清衡の孫秀衡に身を寄せたことがあつた。　鎌倉の捜索がいよ〴〵きびしくなるや、義經は再び逃げのびてこの家にたよつて來た。　ところが秀衡が死ぬと、子の泰衡は頼朝に迫られて、とう〴〵衣川の館を襲つて、義經を殺した。　けれども頼朝は、泰衡がいひつけを斷行することの遲かつた罪を責め、みづから大軍を率ゐて奥州に向かつた。　軍馬を進めて白河關を越える折は、ちやうど初

秋の頃であつた。部下の勇士梶原景季は馬をひかへて、

秋風に草木の露をはらはせて
君が越ゆれば關守もなし

と詠んだ。まことにこの歌のとほり、頼朝の盛な旗風は、忽ちにして敵軍をなびかせ、僅かの間に泰衡を滅した。この時、平泉の館は兵火にかかつて、清衡



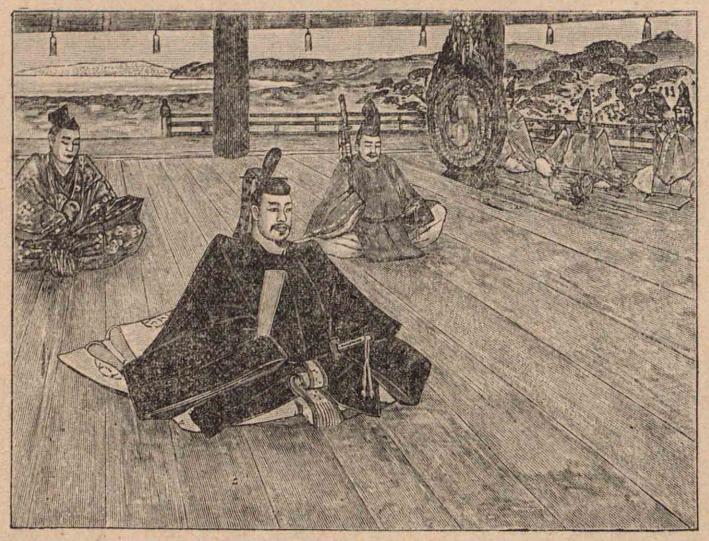
金色堂（内陣）

中尊寺

頼朝が征夷大將軍に任ぜられる

以來の榮華のあとは、むざんにも一片の煙と消えうせてしまつたが、多くの富を費して營んだ中尊寺は、幸にも類燒を免れ、その金色堂は今に殘つて、華麗な裝飾が、なほ昔の榮華を物語つてゐる。

かうして、全國統一の業が全く成つたので、紀元一千八百五十二年（第八十二代後鳥羽天皇の建久三年）に、頼朝は征夷大將軍に任ぜられた。これから幕府は名實共に備り、武家政治七百年



鶴岡八幡宮に詣でる源頼朝

武士道の養成

の基を開いた。かうして武家が政治の實權を握ることとなつたのは、わが國體にかんがみて、誠におそれ多いことであつたと言はねばならぬ。

賴朝は八年間將軍職にあつたが、その政令が簡易で、よく行屆いた。賴朝は、平氏が柔弱に流れて、早く亡びたのにかんがみ、部下の奢を戒め、武藝を勵まし、殊に孝義を重んじて、武士道の養成につとめた。幼い頃から艱難をしのぎ、つひに富士の裾野の卷狩に、父の讐を討つた曾我兄弟の行に感じて、兄弟のなきあとを弔はせ、また奥州征伐の時、平泉の家臣が、泰衡を殺して降參したのを、長い間の主恩を忘れた不義者として斬らせたのも、皆武士道を勵ます爲であつた。かくて、武士は儉約を守つて武を尚び、また互に恩義を重んじ、名を惜しみ、死を恐れぬ美風をつくりあげた。この氣風は永くつゞいて、鎌倉武士の名は、後の世までも高かつた。

北條氏が幕府の實權を握る

藤原秀郷……清衡（平泉三代）―基衡―秀衡―泰衡

第二十　北條氏の政治

賴朝は武家政治をはじめて、よく天下を治めたけれども、生まれつき至つて疑深く、さきには義經を滅し、ついで範賴をも殺し、またとかく功臣を遠ざけたので、自分の助となるものがなくなり、源氏の家運はやうやく衰へていつた。ところで、賴朝の妻政子の父である北條時政は、はじめから源氏を助けて功があり、勢がなかなか盛になつた。さうして

圖書之印

賴朝の薨じた後、將軍賴家を廢して、その弟實朝を立て、みづから執權として威勢を振るつた。やがて實朝が害せられると、時政の子義時は、姉の政子と相談して、京都から藤原賴經を將軍に迎へ、自分は執權として、政治を思ふまゝにした。この後も、藤原氏を迎へ、後には皇族から幼い方を迎へて將軍と仰ぎ、北條氏は幕府の實權を握つたのであつた。

政子の內助

源氏は僅かに三代で亡び、新たに鎌倉の主となつた賴經は、まだやつと二歳の幼年であつたから、政子が專ら政治を聽いた。政子は雄々しい生まれつきで、男まさりといはれた。かつて、富士野の卷狩に、賴家が幼少の身で一匹の鹿を射とめた時、賴朝は喜のあまり、特に使をやつて政子に知らせた。すると、政子は、「武將の嫡子が鹿を射たとて、別に珍しいことでない。」と言つて、かへつてその仰々しさを諫めたといふことである。かやうな氣象であつたから、賴朝の創業にあづかつて大いに內助の功を立て、夫に先立たれて尼となつた後も、久しく幕府の政治にたづさはり、よく將士をなつけて權勢があつた。

北條氏の無道

時に、後鳥羽上皇は、かねてから政權を朝廷に回復し給ふ御志があり、遂に承久の變となつたのであるが、義時は子の泰時らに命じて京都へ攻上らせ、おそれ多くも三上皇を遠島に遷し參らせたばかりか、一族のものを六波羅探題に任じて畿內・西國を鎭めさせ、あはせてひそかに萬一の備とし、やがては皇位繼承の御事にまで干涉し奉るやうになつた。

六波羅探題

北條氏のかうした振舞は實に大逆無道で、その罪は天地の

泰時・時頼の政治

いれないところである。

しかるに、北條氏には泰時・時頼のやうに政治に勵むものがつゞいて現れたので、その勢力はます〳〵盛になつて行つた。

時頼諸國を廻る

貞永式目

泰時は無慾な人で、政治を行ふにも公平を第一とし、必ず他の人々の意見を聞いてこれを決した。また第八十六代後堀河天皇の貞永元年には、貞永式目五十一箇條を定めて武家政治の本とするところを示した。

泰時の孫時頼は、幼い時に父を失ひ母に育てられた。母は松下禪尼といつて、みづから障子を切張して儉約を教へた程のつゝましやかな人である。時頼は、よくその戒を守つて質素な生活をし、部下を導いた。執權をやめて最明寺に入つた後も、諸國を廻り歩いて、したしく人々の困苦をたづねたので、地方の役人は互に戒め合つて政治に勵み、爲に風俗も大いに改つた。

かやうに北條氏の政治は、公平をむねとし、人々に情を加へたので、幕府は長く榮えた。殊に儉約をすゝめ、民力を養つて、國は富み幕府の財政は豐かになつた。したがつて元寇のやうな國難に際しても、よく莫大な費用をさゝへるこ

とが出來たのである。

源義朝―頼朝
　　―女
　　―政子（北條時政女）―頼家―公曉
　　―實朝
　　―……藤原能保
　　―……頼經―頼嗣

北條時政―義時―泰時―時氏―時頼―時宗―貞時―高時―時行
　　―○―實時…實政

蒙古が起る

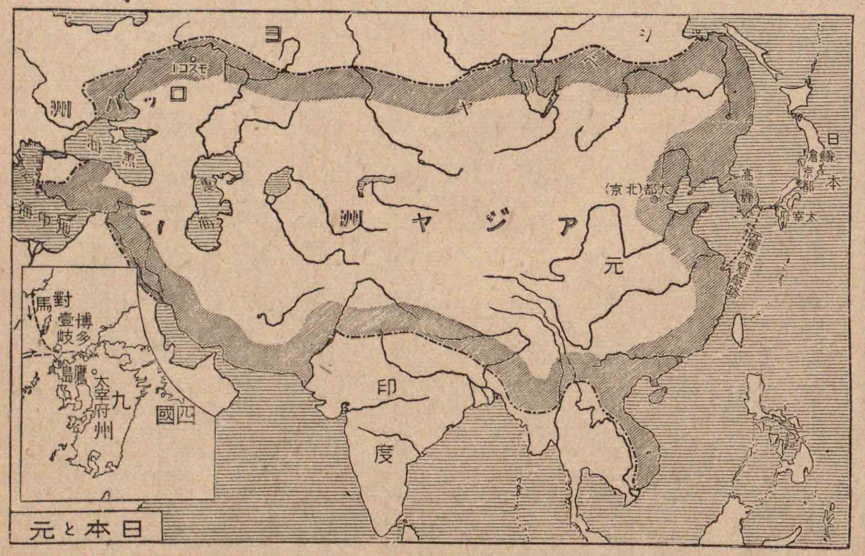
第二十一　元寇

時頼の子時宗の代になつて、思ひがけなく蒙古と交渉がはじまり、遂には未曾有の國難となつた。蒙古は、鎌倉時代の初、支那の北方に起つて、しだいに勢力を増し、アジヤの西

蒙古の使をしりぞける

北地方を從へ、遠く西の方ヨーロッパに侵入した。さうして、その王忽必烈の代になると、南は宋をおさへて、都を今の北京にさだめ、東は朝鮮半島に迫つて高麗を屬國とした。高麗は、さきに新羅に代つて半島を統一した國である。

忽必烈は、高麗を征服した勢で、わが國をも從へようとはかり、第九十代龜山天皇の文永五年に、高麗王を通じて好を我に求め



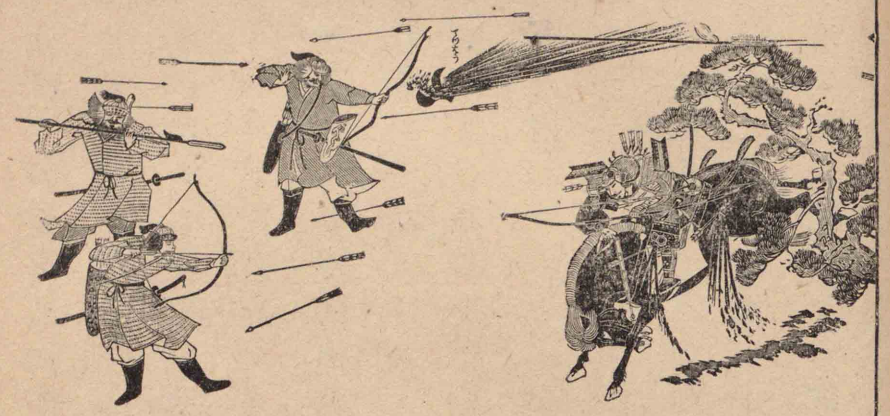
日本と元

て來た。けれども、その國書には、わが天皇を、單に日本國王と申し上げ、忽必烈みづからは大蒙古國皇帝と稱へて、しきりに自分の威德を述べ、もし通好をこばめば、兵力を用ひるとの意をさへ示してあつた。朝廷では文辭の無禮なのに對して、回答をお與へにならなかつた。翌年、彼の使者がまた來たが、執權時宗はきつぱりこれをしりぞけ、一方西國の將士に命じて、嚴重に兵備を修めさせた。

元寇をうち破る

文永の役

時に、蒙古は國號を元と改め、更に使を以てわが服從をうながして來たが、使はいつも追ひかへされたので大いに怒り、第九十一代後宇多天皇の文永十一年に、大擧して攻寄せて來た。元



文永の役

軍は、筑前を侵し、博多海岸に上陸すると、隊を組み鼓をうつて、巧みに進退かけひきをし、しかも盛に毒矢を飛ばし、鐵砲をも放つて、わが軍に迫つた。これまで、一騎打の戰にしかなれてゐなかつたわが將士は、非常な苦戰におちいつたが、勇氣を振るつてやうやくこれを退けることが出來た。これからわが軍は、團體訓練の必要を感ずるやうになつた。

時宗の決心

元は、その後も、また使を送つて來たが、時宗はこれを斬つて、わが決心の程を示した。

九州探題

さうして、北條實政を九州の探題とし、防壘を博多灣の海岸に築かせて、ます〳〵防備を嚴重にし、更に我から進んで、彼を討たうとさへ企てたのであつた。この間に、元はつひに宋を滅し、その勢を以て、紀元一千九百四十一年（後宇多天皇の弘安四年）、數千艘

我が將士防壘に據つて防ぐ

再び元寇をうち破る

弘安の役

の軍艦をさし向けて、再びわが國に押寄せて來た。

この度は、さすがの敵軍も、わが防壘にさゝへられて、上陸することが出來なかつた。わが勇士は、たび〳〵小船に乘つて、見上げるやうな敵の大艦を襲ひ、大いに敵軍をなやました。たま〳〵七月晦の夜中から、にはかに吹起つた神風に、さしもの敵艦も、秋の木の葉の如く吹きみだされて、沈没するものが數知れず、わが軍はこの時ぞとばかり攻寄せて、とう〳〵殘兵を滅してしまつた。なほこの後も、元はしばしば再擧をはかつたが、わが威勢に恐れて果さず、遂にわが國をうかゞふことを斷念した。

大いに國威を揚げる

當時、アジヤからヨーロッパにかけての諸國は、たいてい元に侵されたのであるが、ひとりわが國のみは長期にわたる

日本の名が世界に知られる

困難にたへつゝ、この大敵をうち破つて、大いに國威を揚げたのであつた。これ全くかしこくも天皇の御稜威のもとに、國民が心を一にして國を護つた爲である。その頃、元につかへてゐたイタリヤ人マルコ＝ポーロは、わが國のことを傳へ聞き、歸國の後にこれを西洋に紹介したので、はじめて日本の名を、世界の人が知るやうになつた。

第二十二　鎌倉時代の文化

鎌倉武士の生活

賴朝が武士道を勵ましてから、北條氏もこれにならつて、勤儉・尚武の風を奬勵した。そこで、武士は一般に勇武であり、笠懸・流鏑馬・犬追物・相撲などの勇ましい遊戯を喜び、出來るだけ簡易な生活をした。家屋は板塀または築地でかこ

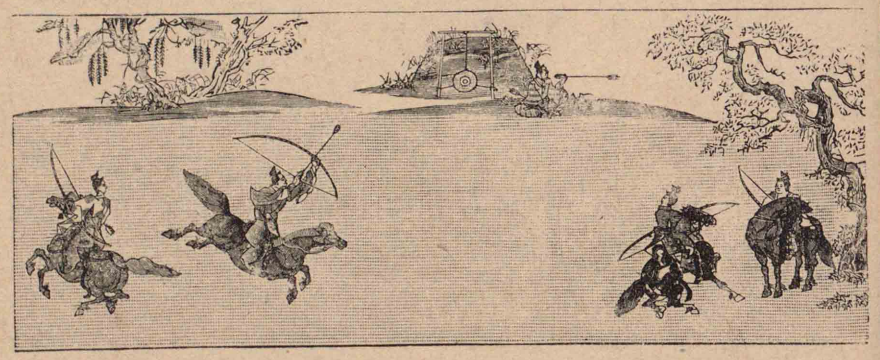
武家造

ひ、茅または板で屋根をふくといふやうに、すべて飾をさけて、實用を主とする武家造となり、服裝はもと貴人の略服であつた直垂を着、烏帽子をかぶるのを常とした。食物も極めて粗末であつた。時賴のやうな人でさへ、小皿に殘つた味噌を肴に、親しい人と一夜酒をくみかはしたといふことである。

この時代の學問

かやうに、武士は專ら武を重んじて書物に親しまず、したがつて學問は一般に振るはなかつた。たゞ北條義時の孫實時が、武藏の金澤に文庫を設け

金澤文庫



笠懸

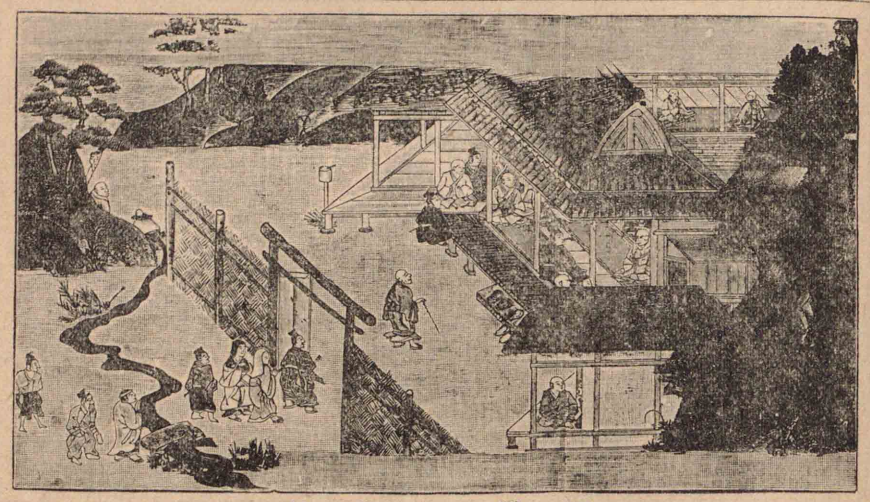
て、和漢の書籍を集め、子弟をも教育したのは珍しいことである。また尚武の時勢に伴なひ、假名交り文で綴つた平家物語や源平盛衰記などの軍記物があらはれて、廣く人々に愛讀せられた。中にも平家物語は、琵琶にあはせて語られ、永く世にもてはやされた。

軍記物

和歌は京都で盛に行はれ、名高い歌人に藤原定家や西行法師などがあつた。定家は後鳥羽上皇の仰を受けて、古今和歌集以後のすぐれた和歌を撰して奉つた。これを新古今和歌集といつて、この時代の歌風を代表する歌集である。また世にいふ百人一首も、定家がえらんだものといはれてゐる。西行は、もと院に仕へた武人であつたが、世の無常を感じて出家し、四方に遊び心のまゝに歌を詠んで一生を終つた。かつて相模を過ぎる時、

新古今和歌集

新佛教が起る



親鸞の説法

心なき身にも
あはれは知られけり
鳴立つ澤の
秋の夕暮

と詠んだ一首は、新古今和歌集にも收められ、世にすぐれた作として知られてゐる。

源平の爭以來戰亂がしばしば起つて、さだめない世の有樣となつたので、生前の幸福よりも、死後の安樂を祈る風が盛となり、これにつれて佛教は、前代

とは大いに趣を異にするに至つた。すなはち、法然は淨土宗をはじめ、その弟子親鸞は眞宗を開き、いづれも熱心に來世の信仰を説いて、專ら阿彌陀佛を念じさせた。

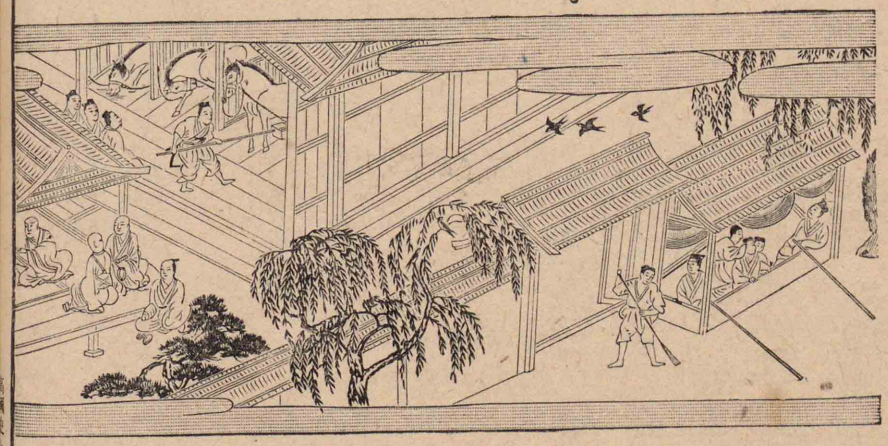
淨土宗

眞宗

ついで、日蓮は日蓮宗を起し、大いに法華經の功德を述べて、その題目を唱へさせた。これらの宗旨はいづれも日本的な新佛敎で、當時の人情にかなひ民間に多くの信者を得た。これに對して上流の間には、主として禪宗が行はれ

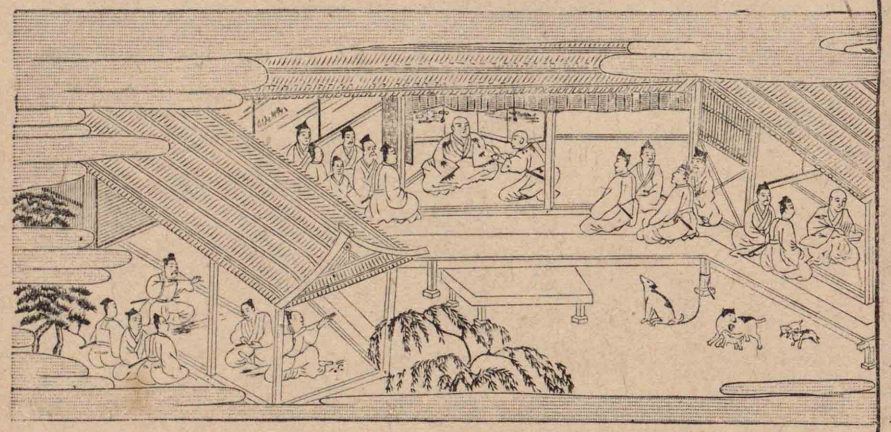
日蓮宗

禪宗



日蓮書を執權時頼に

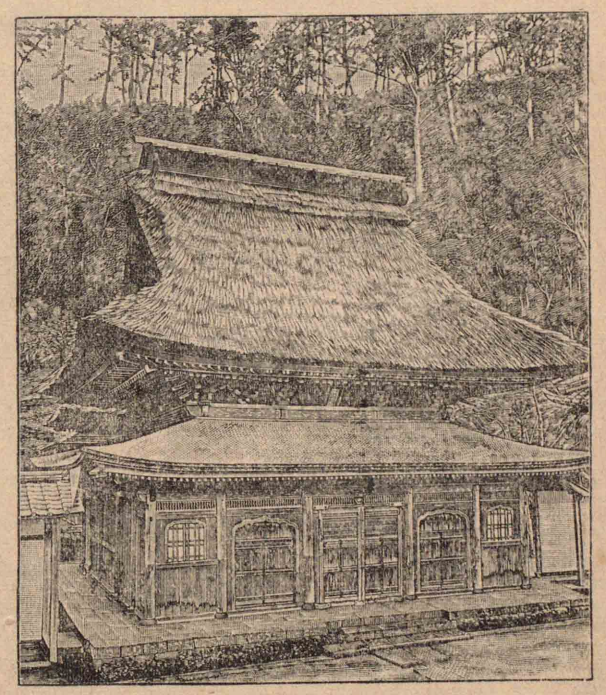
た。禪宗には臨濟・曹洞の二派があり、榮西と道元が宋に渡つてそれぞれ傳へて來たもので、以來數多の名僧が宋から來朝するやうになつて、ます〳〵世にひろまつた。その敎は特に武人の氣風に合ひ、これを信仰して坐禪をくみ、精神を練る武士が少くなかつた。榮西はまた、茶の種子を宋から持歸つて植ゑた。これから、茶がしだいに諸國に栽培せられるやうになつたといはれてゐる。



獻ず（鎌倉武士の生活）

美術・工藝が改る

鎌倉五山

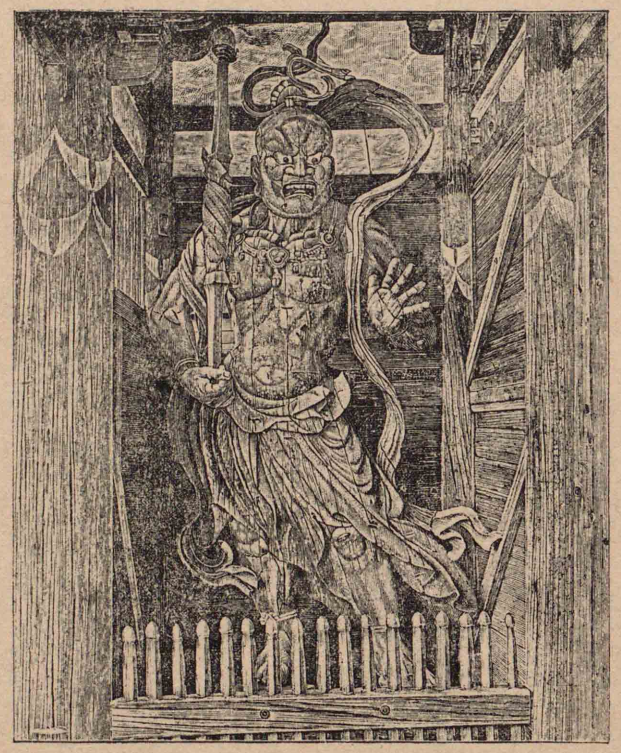


圓覺寺舍利殿

禪宗が行はれると共に、寺院の建築には新たに支那風が取入れられて、鎌倉には建長寺・圓覺寺をはじめ、名高い禪寺が五箇寺も建てられ、鎌倉五山といつた。彫刻では、運慶などの作が有名である。運慶は定朝の子孫で、勇壯な佛像を刻んだ。東大寺南大門の仁王の像などは、當時の剛健な氣象をよくあらはした名作である。畫家には、肖像畫

に巧みな藤原信實があり、また戰爭の情景や社寺の由緒などをゑがいた繪卷物類が、當時の人心に迎へられて、盛に世にあらはれた。

武器は、時代の要求に伴なつて大いに發達し、岡崎正宗の如き名工があらはれて、精巧を極めた刀劍が製作され、日本刀の名は宋にまでひゞきわたつた。また加藤景正は、道元に從ひ、宋におも



南大門の仁王

むいて陶器の製法を習ひ、歸國の後、尾張の瀬戸燒をはじめたので、これから製陶の術が大いに進歩した。

第二十三　北條氏の滅亡

北條氏が衰へる

鎌倉幕府は、元寇の擊攘とその後の西海防備に多額の軍費を使用した爲、その財政が困難となり、戰功の將士に對して十分の恩賞を施すことが出來なかつた。一方元寇に際して振るひ起された國民精神は、おのづから國體に對する自覺をよびさました。かうして北條氏に對する信望はやうやくうすれ、その勢威はしだいに衰へていつた。

しかし、北條氏はみづからその衰運には氣づかず、いたづらに目前のことにのみとらはれ、おそれ多くも皇室の御事

に干渉し奉るやうな有樣であつた。

後醍醐天皇の親政

元寇の後四十年ばかりたつて、龜山天皇の御孫にあたらせ給ふ第九十六代後醍醐天皇がお立ちになつた。天皇は英明にましまし、御父後宇多上皇の院政の後は、御みづから政をお執りになり、北畠親房らの人材を用ひて、大いに政治をお改めになつた。すなはち、諸國の關所を廢して、往來の便をはからせられ、また富めるものの買占めた米穀を、價を定めて賣らせるやうにし給うたばかりでなく、おそれ多くも日々の御膳部を御節約になつて、貧民をお惠みになり、深く萬民を御あはれみになつた。

北條高時が奢に耽る

時に鎌倉では、執權北條高時が暗愚で、元寇後の財政を立てなほさうともせず、かへつて奢に耽り、田樂といふ歌舞を喜び、また鬪犬の遊を樂しみなどし

て、少しも政治を顧みなかつた。そこで、天下の民心はいよいよ幕府を離れて、武士のうちにも反くものがあらはれるやうになつた。

政權御回復の御志

天皇ははやくから北條氏の無道をお憤りになり、後鳥羽上皇の御志をついで、政權の御回復をお考へになつてゐたが、幕府がかく人心を失つたのを機會に、いよ〳〵鎌倉を討たうと御決心になり、まづ皇子護良親王を僧徒と結ばせ、ひそかに謀をお進めになつた。高時はいちはやくこれを知り、承久の例にならつて、天皇を遠國に遷し奉らうとした。二階堂貞藤は、「武家が政權を執つて、すでに百數十年、今日まで武威があまねく海内にかゞやいたのは、ひとへに上御一人を敬ひ奉り、下に善政を施した爲である。しかるに今、主

上を遠國に遷し奉り、朝臣たちを罪しようとするのは、臣下の道でない。ひとへに勅命に從ひ奉り、つゝしんで居るならば、君もきつと思し召しなほし下さることであらう。これこそ國家太平武運長久の途である。」と言つて、その不忠の企を諫めた。しかし高時は聞入れず、大兵を動かして京都へさし向けたので、天皇は神器を奉じて笠置に御避難あらせられ、勤皇の兵をお募りになつた。楠木正成は、たゞちに河内から馳參じて、勅命を拜し、急ぎ歸つて城を赤坂に築いた。

隱岐にお遷りになる

まもなく笠置がおちいり、天皇は隱岐にお遷りになることになつた。この時、備前の兒島高德は、一族と共に天皇を迎へ奉つて、勤皇の義兵を擧げようとはかり、御道筋にお待ち申し上げたが、不幸にもその志を果すことが出來なか

勤皇の軍が所々に起る

名和長年天皇を迎へ奉る

つた。

この間に正成は、金剛山の一角、千早の天險にたてこもり、謀をめぐらして賊の大軍をなやまし、護良親王は兵を吉野に擧げ、令旨を四方に下して、勤皇の士をお募りになつた。これから諸國の武士は、感奮して義兵を擧げるものが多く、赤松則村は播磨に、土居・

六波羅がおちいる

北條氏が亡びる

得能氏は伊豫に、それ〴〵勤皇の旗をひるがへして、勢が大いに振るつた。

天皇は、隱岐ではるかにこの有樣を聞し召され、六條忠顯を從へてひそかに伯耆にお渡りになり、その地の豪族名和長年を召して、行在所を船上山にお定めになつた。時に肥後の菊池武時は、勅を奉じて博多の探題を襲ひ、はな〴〵しく戰つて討死した。また忠顯は、則村と共に山陰・山陽の兵を率ゐて、六波羅の探題を攻めた。たま〴〵高時の命によつて西上した足利尊氏は、にはかに勤皇の軍に味方し、忠顯らと兵を合はせて六波羅をおとしいれ、遂に京都を回復した。

新田義貞は、護良親王の令旨を奉じて、勤皇の兵を上野に

起し、軍を進めて鎌倉に討入つた。高時は防いだがかなはず、遂に父祖の菩提所東勝寺に退いて、一族將士と共に自害した。この時鎌倉にゐた結城宗廣も、義貞に力を合はせ戰功を立てた。その後まもなく博多の探題も、九州の官軍に攻滅された。時に紀元一千九百九十三年(元弘三年)、鎌倉幕府は全く亡びてしまつた。

後醍醐天皇が還幸あらせられる

第二十四　建武の中興

後醍醐天皇は、船上山で京都の回復を聞し召されると、すぐこゝを御出發になり、京都へ向かはせられた。楠木正成は、兵を率ゐて兵庫にお迎へ申し上げた。折も折、鎌倉の勝報がとゞいたので、龍顏殊の外に麗しく、還幸の儀式もおごそかに、正成をはじめ多くの武士を從へ、めでたく京都に還幸あらせられた。拜觀の人々は都大路に滿ちあふれて、ひとしく御德をたゝへ奉つた。

中央の政治を改新し給ふ

天皇は、まづ關白を廢し、御みづから記錄所にお出ましになつて、政治をお聽きになり、舊規にかゝはらず、新例をお開きになることが少くなかつた。また當時は、兵亂の後をうけて、土地などに關する訴が多かつたので、新たに雜訴決斷所を設け、公卿らをその職員に任じてこれをさばかせられた。なほ護良親王を征夷大將軍として兵馬の權を統べさせ、武者所を置いて武士を監督させ給うた。

地方の政治を整へ給ふ

天皇はまた、義貞・正成・長年・尊氏らを諸國の國司に任じて、それ〴〵領地を賜はつた。殊に東國は重要の地であるか

建武の中興

ら、北畠親房の子顯家を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じて奥羽を鎭めさせ、尊氏の弟直義を相模守に任じ、皇子成良親王を奉じて、鎌倉に於て關東諸國を治めさせ給うた。

かうして、中央及び地方の制度は備つた。やがて年號を建武とお改めになつたので、世にこれを建武の中興といつてゐる。

天下が再び亂れようとする

天皇はかくも御熱心に、中興の政治に勵ませられたが、朝臣は久しく政治に遠ざかつてゐた爲これになれず、しかも戰後の訴は日ましに積つて、政務がはかどらなかつた。その上賞罰に關する事になると、利害の心が先になつて不平を起し易く、特に武人のうちでも大義にくらいものは、ひそかに武家政治の昔を慕つた。一方朝臣は、さして功勞のないものでも朝恩にほこり、武人を輕んじたので、公武が互に反目し、天下はまた亂れようとする形勢となつた。

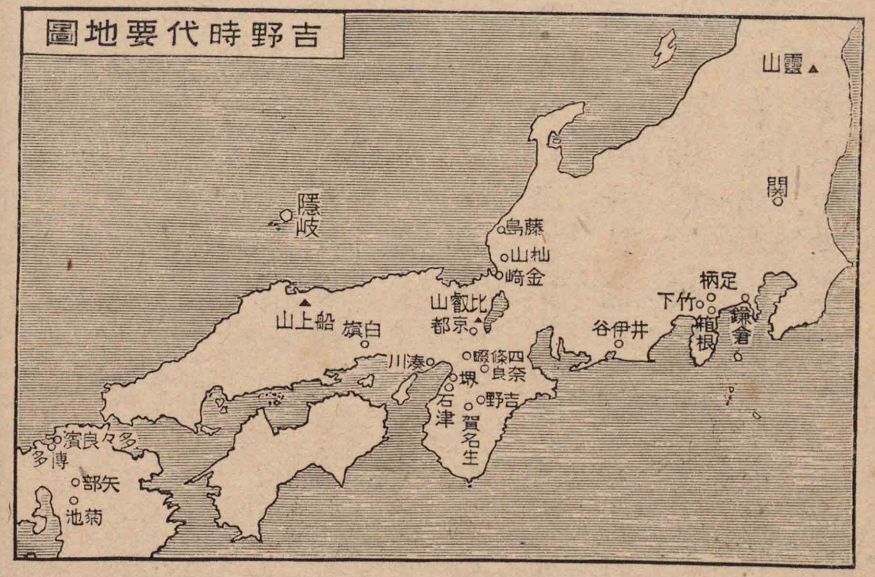
尊氏が反く

第二十五　吉野の朝廷

足利尊氏は新田義貞と同じく、源義家の子義國の子孫である。久しく家臣の家筋にあたる北條氏の下に立つことを快く思はず、源氏の幕府を再興しようといふ志があつた。今や尊氏は功臣として勢を得たのに乘じ、ひそかに不平の武士の心をとらへてこれをなつけ、威望の高い護良親王と、大功ある義貞とをしりぞけて、その野心を遂げようとした。

護良親王は、早くも尊氏の野心を見ぬかれ、尊氏を除かうとおはかりになつたが、かへつて尊氏の策謀によつて、鎌倉

に幽せられ給うた。たまたま北條高時の子時行が兵を起して、鎌倉を攻めると、直義はこれを防ぎかね、おそれ多くも親王を害し奉つて、西へ走つた。尊氏はみづから時行を討つことを願ひ出で、勅許を待たないで勝手に東國に下つて、時行をうち破つた。さうして鎌倉に據つてつひに反旗をひるがへし、義貞を討つ名目で兵を募つた。そ



正成・忠顯・長年らの戰死

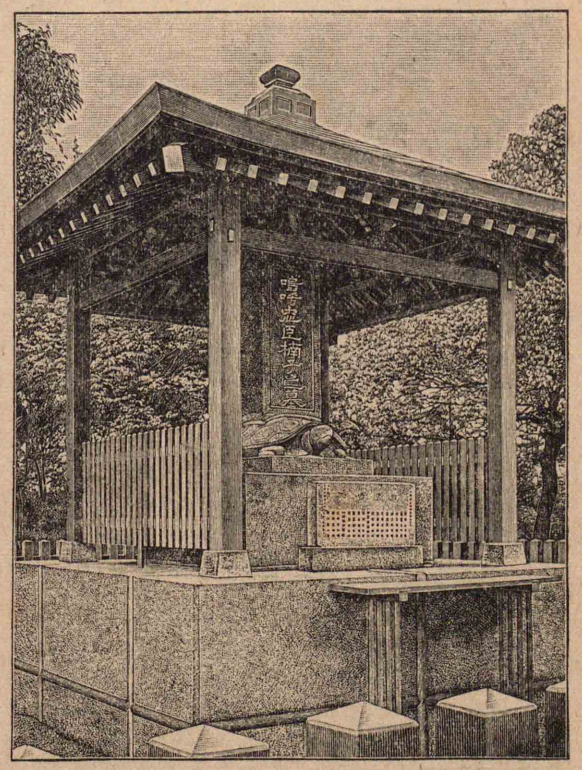
後醍醐天皇が吉野に行幸し給ふ

こで天皇は、義貞に命じてこれを討たせ給うたが、戰利なくして引きかへした。尊氏兄弟は、あとを追つて京都に攻めのぼつて來たが、やがて奥州からのぼつて來た北畠顯家が、義貞・正成らと力を合はせて、大いに尊氏らを破つたので、尊氏は遠く九州へ走つた。

しかし尊氏は、忽ち西國で勢を盛返し、直義と共に大軍を率ゐて東上した。義貞は正成とこれを兵庫に迎へ討つて奮戰したが、正成は湊川で討死し、義貞も京都に退いた。天皇はまた比叡山に行幸せられ、尊氏兄弟は京都に侵入した。忠顯・長年らはこれと戰つて討死した。

京都に入つた尊氏は、賊名を避ける爲、第八十九代後深草天皇の御曾孫豐仁親王を立てて天皇と申し上げたが、やがていつ

はり降つて、後醍醐天皇の還幸をお願ひ申し上げたので、天皇は、かりにこれを許して、還幸あらせられた。すると尊氏は、おそれ多くも天皇を花山院に幽し奉つたが、天皇はやがて神器を奉じて、ひそかに吉野に行幸になり、行宮をここに定め給うて、天下の勤皇の士をお勵ましになつた。時に、紀元一千九百九十六年（延元元年）である。

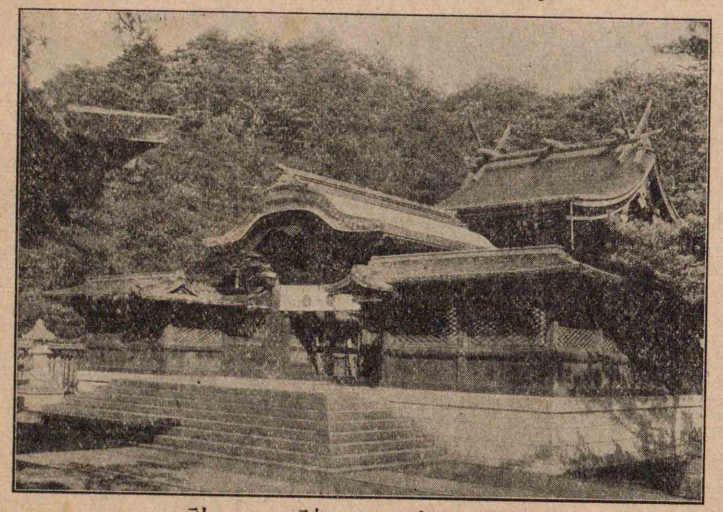


楠木正成の廟

義貞の戰死

新田氏一族の忠勤

義貞は、さきに比叡山の行宮で勅を受け、皇太子恒良親王と皇子尊良親王を奉じて越前におもむき、金崎城にたてこもつて北國の官軍を統べることとなつた。しかし城は忽ち賊の大軍にかこまれ、義貞の子義顯らの奮戰も空しく、城はおちいり義顯は壯烈な最期をとげた。義貞はなほも屈せず、弟義助と共に勤皇の兵を集めて北國に勢を振るつたが、惜しくも藤島の戰で討死した。しかし新田氏の一族は、義貞のなき



藤島神社

後も終始一貫して朝廷の爲に忠勤をはげんだ。

顯家の戰死

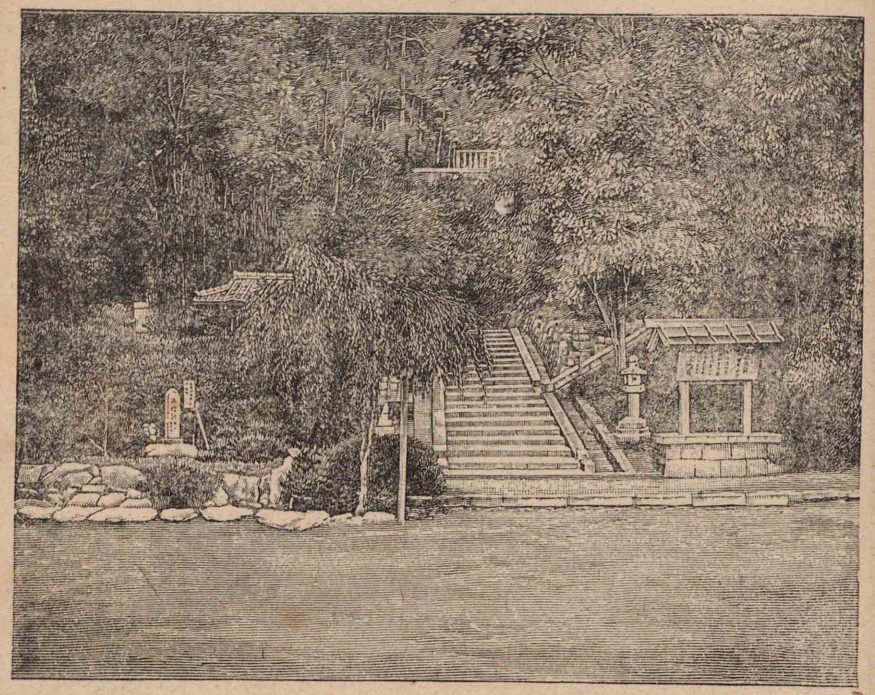
この頃、顯家は義良親王を奉じて西上し、京都の回復をはかつて賊軍と戰ひ、和泉の石津で討死した。そこで親房は東國の官軍を統べようとして、義良親王を奉じて海路陸奥に向かつたが、暴風にあつて船がちり〳〵になり、親房は常陸に着き、親王は吉野へお歸りになつた。

天皇の崩御

たま〳〵天皇は御病にかゝらせ給うた。天皇は、諸事御心のまゝにならぬうちにも、常に萬民の上を思し召され、

世治り民安かれと祈るこそ
わが身につきぬ思なりけれ

とお詠みになつた。まことにおそれ多いことである。御病がいよ〳〵重らせられると、ねんごろに興復の事を遺詔



後醍醐天皇の御陵

あらせられ、「朕卽ち早世の後は、第八の宮を天子の位に卽け奉り、賢士・忠臣事を圖り、義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎭むべし。これを思ふ故に、玉骨はたとひ南山の苔に埋もるとも、魂魄は常に

北闕の天を望まんと思ふ。もし命をそむき義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらじ。」と仰せられて、とう〳〵行宮で崩御あらせられた。そこで、義良親王が御位にお卽きになり、第九十七代後村上天皇と申し上げる。

宗良親王の御轉戰

時に征東將軍宗良親王は、はじめ遠江、後に信濃を根據として、所々に轉戰しつゝ、回復をはからせられ、

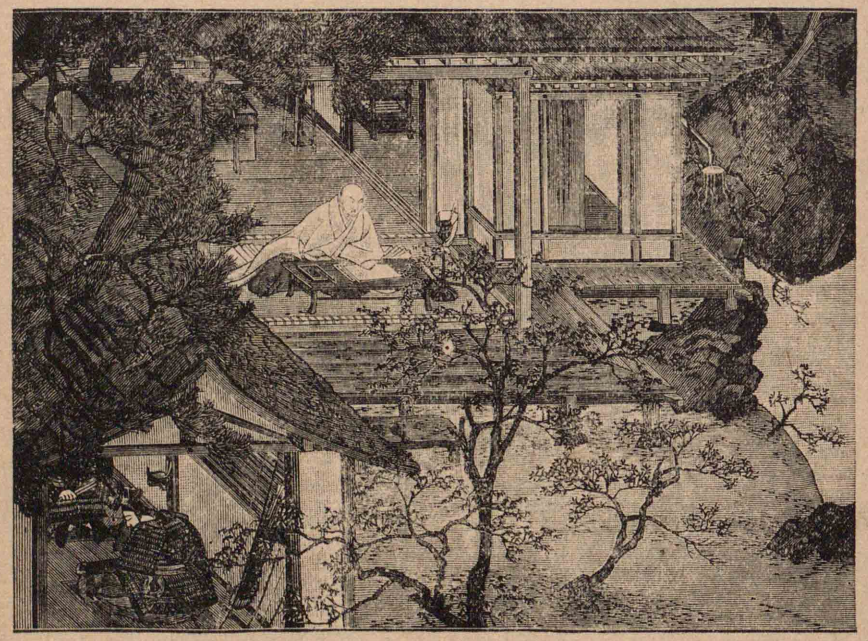
君のため世のためなにか惜しからん
捨ててかひある命なりせば

親房の東國經營

の御歌を作つて士氣をお勵ましになつた。また親房は常陸にあつて、四方から賊兵に圍まれたが、動ずる色もなく、軍陣のあひまに、筆をとつて神皇正統記をあらはし、神代から後村上天皇に至るまでの御歷代の大要をしるし、皇祖の肇

神皇正統記

國の精神に基づいて、吉野朝廷の正統であることを明らかにした。しかし、東國の經營も思ふやうに運ばなかつたので、やがて吉野に歸り、楠木正行らと力を合はせて、天皇をお助け申し上げた。かくて官軍の勢がまた振るつたので、賊將高師直は大軍を率ゐて攻寄せて來た。正行



北畠親房神皇正統記をあらはす

正行の戰死

懷良親王の御奮戰

後龜山天皇の還幸

は死を決して吉野を出發し、河内の四條畷に防いで大いに奮戰したが、力盡きて遂に戰死し、天皇は難をお避けになつて、賀名生にお遷りになつた。ついで、朝廷の柱石と賴まれてゐた親房も、病にかゝつて薨じた。

かやうに官軍は不運のうちに勢も衰へた。九州では菊池武時の子武光が、征西將軍懷良親王を奉じて、賊將少貳氏を筑後川に破り、子孫またよく忠節を守つて屈しなかつたが、その家もつひに衰へ、第九十代後龜山天皇の御代になると、諸國の官軍はいよ〳〵振るはなくなつた。時に足利義滿は、大内義弘を遣はして、天皇の還幸をお願ひ申し上げ、天皇は、この上なほ戰亂がつゞいて、萬民の苦しみの加ることをあはれみ給うて、これをお許しになつた。さうして紀元二千五十二年(元中九年)、京都に還幸あらせられ、御位を第百代後小松天皇にお讓りになつた。後醍醐天皇が吉野に行幸せられてから凡そ六十年、長い間つゞいた兵亂はこゝにはじめて鎭まることとなつた。

足利氏の內訌

- 後醍醐天皇
  - 尊良親王
  - 護良親王
  - 宗良親王
  - 恒良親王
  - 成良親王
  - 後村上天皇
    - 長慶天皇
    - 後龜山天皇
  - 懷良親王

第二十六　室町幕府の盛時

さきに尊氏は、朝廷に反いて官軍と戰ひ、部下の諸將には

多くの領地を與へて、人望を得ることにつとめた。それ故將士の中には、恩になれ功にほこつて、とかくその命令に從はないものがあつた。その上、直義は尊氏・義詮父子と仲が悪く、部將もまたそれ〴〵二派に分かれて、内訌が絶えなかつたので、足利氏の權威はおのづから輕んぜられた。しかるに義詮の子義滿が家をつぎ、一族細川頼之が心をくだいてこれを助けるに至つて、やうやく足利氏の威勢が高まつて來た。

義滿が強族をおさへる

この頃、強大な部將に山名氏清があつた。その一門の領地は畿内・中國にわたつて十一箇國に達し、實に全國の六分の一に當つた。氏清は勢にまかせて、わがまゝな振舞が多かつたので、義滿は頼之と共にこれをうち滅した。また周

防の大内義弘は、かつて後龜山天皇の還幸をおとりなし申した功と、その家の富強とを頼んで獨立をはかり、義滿から夫役を割りあてられた時も、「わが士卒は弓矢を業とする、土木に使役することは出來ない。」と言つて、ひとりこれに應じなかつた。後、程なく反いて兵を擧げたので、義滿は義弘をうち平げた。そこで諸將は皆恐れて、足利氏の命令に服從するやうになつた。

幕府の制度を整へる

義滿は、華美な花の御所を京都の室町に造つて、こゝに住み、後龜山天皇の還幸あらせられた後は、征夷大將軍として威勢を振るひ、大いに室町幕府の制度を整へた。その組織は、おほむね鎌倉幕府に似てゐるが、やゝ異なつたところもある。すなはち、諸政を統べるものを管領といひ、足利氏の

義滿が奢に耽る

一族斯波・細川・畠山の三氏の中からこれに任じた。その下に、政所・問注所・侍所があり、侍所の長官を所司といつた。

かうして、幕府の基が固り、勢が盛になるにつれて、義滿はだん〳〵奢に耽るやうになつた。義滿は職を子義持に讓つた後、朝廷に願つて太政大臣の高官にのぼり、やがて辭職して出家し、別莊を北山に構へて、林泉の美をつくし、三層の金閣を建てて風流を極めた。しかもこゝにゐて、なほみづから大小の政務を決したが、心いよ〳〵驕り、つひには出入の行列を上皇になぞらへ、北山の別莊には、皇居にまねて紫宸殿・公卿の間などを設けた。世にこれを公方と呼んだ。公方とは、もと朝廷を指し奉ることばであるのに、今これを將軍の尊稱に用ひるやうになつて、名分が大いに亂れたの

金閣

名分が亂れる

明と好を修める

は、まことに歎かはしいことであつた。

義滿はまた、使を支那にやつて、再び國交を開いた。支那との通商は、元寇の後もなほ絶えることなく、我が商船はひそかに彼の地に往來してゐたが、やがて元が亡び明が起ると、義滿はこれと好を修め、通商によつて莫大な利益を收めることは出來たが、利益を求めるのに專らなあまり、義滿は明主から日本國王の號を受け、みづから臣と稱へるなどは、なはだしい失體を重ねた。義持はこれを恥ぢて、きつぱり通交をこばみ、明が勢を賴んで、兵力を用ひようとおびやかして來たのに、對し、元寇の例を引いてこれに應じ、少しも恐れぬ態度を示した。

外交上の失體

關東管領

幕府は、地方を治めるにも、鎌倉幕府の例にならつて、諸國

に守護・地頭を置いたが、特に源氏に關係の深い東國を重視し、關東管領を鎌倉に駐めてこれを治めさせた。元來尊氏は、鎌倉に幕府を開きたいと思つてゐたが、京都を離れることが出來なかつたので、次男の基氏を鎌倉に居らせ、その子孫をして永く東國を鎮めさせることにした。これが關東管領の起である。關東管領は、はじめはよく東國を鎮めて、京都の幕府を助けたが、威望が加るにつれて幕府を輕んずるやうになり、かへつて幕府の妨となるに至つた。かうして足利氏の内訌が再びあらはれ、幕府の勢威は僅かに義滿一代で早くも傾きはじめた。

足利貞氏
- 尊氏
  - 義詮
    - 義滿（一代將軍）
      - 義持（二）
        - 義量（三）
  - 直義
  - 基氏

幕府の威信が地に墜ちる

第二十七　室町幕府の衰微

義教（四）
- 義勝（五）
- 義政（六）
  - 義尚（七）
- 政知
  - 義澄（九）
    - 義晴（一〇）
      - 義輝（一二）
      - 義昭（一三）
    - 義維
      - 義榮（一三）
- 義視
  - 義稙（八）

義教は生まれつき剛毅で、幕府の威勢を張らうとつとめた。彼は關東管領を滅し、またしきりにわがまゝな豪族をおさへようとした。したがつて、これを怨むものが少くなく、つひに赤松滿祐は、領地を削られることをおそれて、將軍を自分の邸に招き、これを害して本國播磨に逃げかへつた。そこで管領細川持之は、山名宗全らをさし向けて滿祐をう

財政が苦しく政治が亂れる

ち滅させ、その領地を宗全らに分ち與へた。その結果、氏清以來衰へてゐた山名氏が、再び興ることとなつた。以來、幕府の威信は地に墜ち、幼主が相ついで立つたので、權臣が力を頼んでわがまゝをするやうになつた。

義政は僅かに九歳で家をつぎ、十五歳で將軍に任ぜられた。彼は少しも政治を顧みず、豪奢な邸宅を營み、夫人と共にしば〳〵能樂や花見の宴などを催した。かくて幕府の財政はしだいに苦しくなつたから、しきりに遣明使を出して錢を求め、或は倉役といつて質屋に課する稅をたび〳〵取りたてた。また前代から德政といつて、一度發令すると貸借をすべて取消すといふ定があつたが、幕府は自分の借財を取消す爲に、みだりにこの令を出して、實に暴政の限を

德政の令

應仁の亂

つくした。諸國の豪族もこれにならひ、種々の名目を設けて重稅を課したので、萬民はいよ〳〵疲弊し、盜賊は所々に起つて海內が騷がしくなつた。

能樂

時あたかも足利氏では、將軍義政の後嗣を定める問題が起つた。さうして、これが機會となつて、細川・山名兩氏の勢威が增すと共に、かねてからの反目が表面化するに至つた。

兩氏はそれ〴〵地方の諸將を味方に引入れようとしたので、天下はおのづから兩分され、おだやかならぬ形勢となつた。紀元二千百二十七年、（第百三代）後土御門天皇の應仁元年、つひに兩氏の間に戰端が開かれ、やがてその味方が全國から雲霞の如く京都に馳集つて、戰亂は十一年の久しきに及んだ。この亂の爲、花の都も一望の燒野とかはり、幕府の威信は全く地に墜ちてしまつた。京都の戰がやんで地方に引きあげた諸將は、割據してなほも戰をつゞけ、騷亂は全國に波及して戰國の世となつた。

第二十八　室町時代の文化

東山時代

將軍義政は、應仁の亂の最中に職を義尙に讓り、ついで東山に別莊を營み、金閣にならつて銀閣を建てたが、その造はいたつて風雅で、庭園の一木一石に至るまで配置の妙を極めた。義政はこゝに閑居して、風流の遊に耽つた。この影響を受けて、文學・技藝が大いに發達したので、世にこの時代を東山時代といつてゐる。

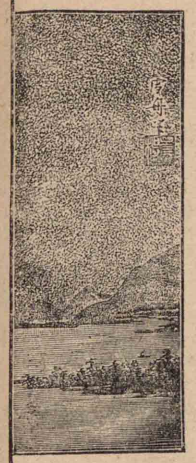
美術・工藝の進歩

義政は東山の別莊に、四疊半の茶室を設けて、

銀閣

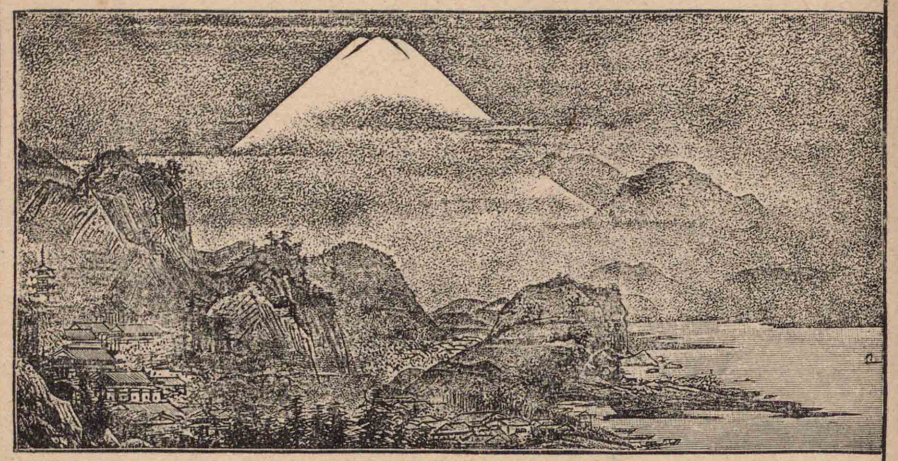
茶の湯

たび〳〵茶の湯を催し、盛に茶器・書畫・骨董の類をもてあそんだので、その風は一般に武人の間に流行した。したがつて美術・工藝は、亂れた世にもかゝはらず著しく進歩し、繪畫には有名な雪舟や狩野元信などが出た。雪舟は備中の生まれで、天才の譽が高かつた。幼い時寺に入つて僧となつたが、畫に熱心で、日夜畫筆をはなさなかつた。壯年京に上つて畫法を學び、更に支那に渡つて技を練り、歸朝後ますます妙筆を振るつたが、特に山水の墨繪を得意とした。元信も、十歳ですでに畫工として、將軍に近侍した程の天才である。父から支那の畫風を習つた上に、大和繪の大家土佐光信の婿となつて、その畫法をも學



佛教

禪宗



雪舟の畫

び、つひに一派の畫風を創始して子孫に多くの名人を出した。繪畫に伴なつて、漆塗の術も發達し、畫家の下繪によつて、精巧な蒔繪を施すやうになつた。陶器の製法もまた、茶の湯などの流行につれて大いに進み、遂には唐津燒の名産を出すまでになつた。

佛教は鎌倉時代の後をうけて、禪宗が上流社會に盛に行はれ、特に足利氏は深くこれを信

仰した。尊氏・直義兄弟は、後醍醐天皇の御靈を慰め奉り、なくなつた勤皇の人々をも弔ふ爲に、京都に天龍寺を建て、なほ諸國に安國寺を設けさせた。

京都五山

ついで義滿も京都に相國寺を開き、天龍寺などと共に、名高い禪寺が五箇寺にも及んだ。これが京都五山である。義滿はその順位を定め、龜山上皇のお建てになつた南禪寺を、五山の上位にする

狩野元信の畫

眞宗

學問と教育

足利學校

寺子屋

た。民間には眞宗・日蓮宗が廣く行はれたが、中でも眞宗は、應仁の頃蓮如が出てから非常に盛になつた。蓮如は當時衰へてゐた本願寺を興す爲に一方ならぬ辛苦をなめ、諸國を廻つて忍耐と才辯をもつて布教につとめ、極めて平易な說教で大いに世の信仰を得た。これから、本願寺の勢力はにはかに興つた。

當時五山の僧は、禪學のみならず儒學にも通じて、教養が高く、また詩文に巧みであつた。天下騷亂の時代に當つて學問が維持せられたのは、主として僧侶の力によるものであつた。しかし上杉憲實の如きは、武人でありながら學問を好み、數多の書籍を下野の足利學校に寄附して、その教育を興した。また寺子屋が起りはじめたのも、この時代のこ

新文藝が起る

とである。

文藝も僧侶の手に成るものが多かつた。この頃、盛に行はれたものに連歌があり、宗祇法師は最もこの道に達してゐた。宗祇は若くして出家し、あまねく四方に遊んで、吟詠を樂しみ、遂に旅行中病にかゝつたが、なくなるまでなほ友人と連歌を詠みかはしたといふことである。また義滿・義政は共に能樂を好んだので、これに用ひる謠曲もしきりに作られた。なほこの時代の初にあらはされた太平記は、おもに吉野時代の事をしるした軍記で、後に大いに世人に愛讀せられるやうになつた。

連歌

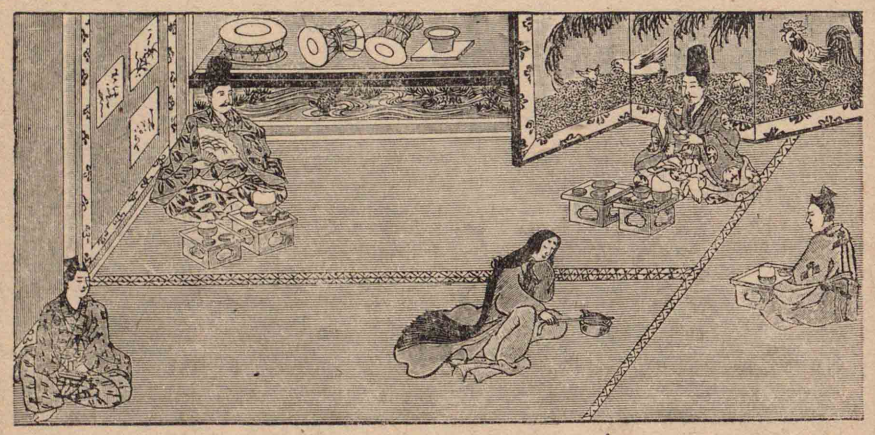
謠曲

風俗がかはる

この時代には、幕府が京都にあつた爲、鎌倉時代の剛健な氣風は、しだいにうすれると共に、一方禪宗などの影響を受

書院造

けて、いつたいに淡泊でしかも氣品のあるものを好む風が起り、したがつて風俗もおのづからかはつて來た。もと僧侶の學問所であつた書院の造りかたは、一般の家屋にも行はれ、入口に玄關を設け、室内には疊を敷きつめ、座敷に床の間を作つて畫幅をかけ、それに香爐や挿花などを飾つて、風流の趣をそへた。また茶の湯の流行に伴なつて、作法もしだいに備つていつた。武士の衣服は、素襖・



室町時代の風俗

長袴から、後には、肩衣・半袴などにうつつてゆき、女子は小袖をうちかけとして着る風が流行し、食物の料理法も大いに進んで、種々の式を備へるやうになつた。今の禮式作法には、この頃から起つたものが少くない。

幕府が衰へる

第二十九　京都の疲弊

將軍義尚は、聰明で學問を好み、當時博學の聞えの高い一條兼良について、治國の要道を聽き、文武の兩道に達してゐた。應仁の亂後、わがまゝな豪族をおさへて、幕府の威權を取返さうとはかり、まづ近江の佐々木氏を攻めたが、不幸にして病にかゝり、空しく陣中で薨じた。これから幕府はますます衰へ、その威令は僅かに近畿の一部に及ぶだけとな

權力が下に移る

京都の衰微

り、財政の不足は富商から金を借りて、やつとこれを補ふといふ有樣となつた。したがつて將軍はたゞ名ばかりとなり、臣下に勝手に廢立せられ、その實權は管領細川氏の手から、更に家臣の三好氏、またその家臣の松永氏と、おひ〳〵下に移つて、遂に將軍義輝は、松永久秀らに害せられた。義輝の弟の義昭は、難を避けて地方に走り、織田信長にたよつた。

騷亂の世とはいひながら、皇室の御日常が極めて御不自由にましましたことは、まことにおそれ多いことであつた。御所の築地が破れてもつくろはれず、市街も應仁の亂に兵火にかゝつたまゝであつたから、遠く三條の橋から、賢所の御あかしが拜まれたといふことである。公卿の多くは、住みなれた京都にとゞまることさへかなはず、めい〳〵緣故

を求めて地方に下り、市民も諸方に離散して、京都はひどいさびれかたであつた。

天皇の御仁慈

しかも御歴代の天皇は、かしこくも御身の御不自由を少しもおいとひなく、ひたすら萬民をあはれみ給うた。後土御門天皇は、應仁の亂を避けて、十年餘りも御所にあらせられなかつたが、この間にも、たび〳〵世の安穩を社寺に祈らせられた。ついで、第百四代後柏原天皇は、三條西實隆らの奔走によつて、やうやく御費用がとゝのひ、御踐祚の後二十餘年たつて、はじめて御卽位の禮を行はせられたが、まして、萬民はいかに難儀をしてゐることかと、お案じになつて、

治めしるわが代如何にと波風の
八十島かけて行く心かな

とお詠みになつた。

第百五代後奈良天皇も、種々の御不自由をしのび給ひつゝ、御みづから經文を寫し、これを諸國に下して、天災をはらひ、民の苦しみを除くことを祈らせ給うた。また伊勢の神宮の社殿が荒果てたのをお歎きになり、たびたび御修繕の事に御心を用ひさせられた。時に、慶光院清順といふ尼が、勅許をいたゞき、廣く全國に費用を募つて、遂に外宮の御造營を果したが、織田氏らもこれに力を盡くした。また諸國の豪族には、心を皇室に寄せ奉り、大内義隆・毛利元就をはじめ御費用を奉るものが少くなかつた。

國民の忠誠

國體の尊さ

朝廷が御衰微になつたことは、國初以來かつてなかつたことであるが、天地と共にきはまりない皇基は微動もしないのみか、かへつて、幕府が衰へると、諸國の豪族は、たゞちに

朝廷に近づき奉つて、忠勤を勵むこととなつた。これわが國體の尊いゆゑんであつて、やがて織田信長が入京すると共に、いつそう皇室尊敬の實をあらはしたのであつた。

第三十　戰國時代の大勢

戰國時代

應仁の亂後、京都はさびれ、幕府の勢威は地に墜ちた。地方では、諸豪族が各地に割據し、互に實力によつて攻防の戰をくりかへした。強者はしだいに弱者を併せて強盛になり、また一族の内部に於ては、主家が亡びて家臣がこれに代るものが多かつた。かういふ狀態が凡そ百年もつゞいたので、世にこれを戰國時代といつてゐる。

關東の分裂

地方の騷亂は、まづ關東の分裂からはじまつた。さきに、關東管領が亡びると、執事の上杉氏がこれに代つたが、關東を統べる實力がなく、政治が亂れ、はては上杉氏自身が二つに分裂して爭ふやうになつた。かうした隙に、伊勢から起つた北條早雲がしだいに東國に手をのばし、その子氏綱・孫氏康と代を重ねる間に、關東の大半は北條氏の占めるところとなつた。

中部の形勢

北條氏に敗れた上杉氏は、越後の長尾氏にたよつた。さうして、上杉氏の家名を讓られた長尾景虎は、上杉氏を稱へ、やがて謙信と號し、關東に攻入つて北條氏と戰つた。謙信は、更に信濃の村上氏を助けて甲斐の武田信玄と相對し、川中島の戰に勇名をとゞろかせた。戰は、かうして中部地方にひろがつていつた。民政に意を用ひて國内の人望を集

め、謙信の攻勢をよくさゝへた信玄も、西上の途、德川家康・織田信長の聯合軍に阻まれ、これを三方原に破つたものの、三河に病死して、その雄圖は空しくなつてしまつた。信玄が死んで武田氏は衰微し、專ら北陸に威を振るふこととなつた謙信も、また宿望の西上を果さうとして、出發の間ぎはに急死した。

奥羽地方

戰は奥羽の地にも起つた。相爭ふ諸豪族の中で、伊達政宗は斷然他を壓してゐたが、何分遠い地方のこととて、天下の大勢に影響するところは少かつた。

織田信長の上洛

地の利に惠まれ、巧みに機會をつかんで、よく上洛の志を果したのは、尾張の織田信長であつた。織田氏は、もと管領家斯波氏の家臣で、主家に代つて尾張を治めてゐたが、やが

て主家の衰微に乘じて獨立し、信長に至つて勢がにはかに盛になつたのである。信長は、桶狹間の奇襲によつて、今川氏西上の企を挫き、德川氏と結んで武田氏に備へ、後顧の憂なく美濃に進出して岐阜に據つた。時に第百六代正親町天皇の御料所回復の仰をかうむり、ついで足利義昭のたより來つたのを好機として、つひに上洛の志をとげることが出來た。信長にもりたてられて、義昭は將軍職に就いたが、やがて信長の威名を忌み、これを除かうとしてかへつて追はれ、

室町幕府の滅亡

室町幕府は亡びた。かうして信長は、いよ〳〵戰國の世を平定すべき位置に立つた。紀元二千二百三十三年（正親町天皇の天正元年）である。

中國の形勢

中國には出雲に尼子經久がゐた。富田城を根據に勢近

隣を壓し、その威は山陰に振るつた。さうして餘勢を驅つてしば〳〵大内氏と戰を交へた。大内氏は、代々周防・長門に據り、その領九州北邊にまで及んだが、義興に至つて更にこれを東方に擴め、更に明との貿易によつて多くの利益を占め、富强を誇るに至つた。しかし、義興の子義隆が文弱に流れ武備を怠つたので、勢威は下り坂となり、やがて義隆は部將の陶晴賢に害されて、大内氏は亡びた。この晴賢を嚴島の弔合戰にうち滅して、大内氏の勢力を受繼いだのが家臣毛利元就であつた。元就は、更に尼子氏を攻降して、つひに中國を平定し、その勢は遙か四國・九州にまで及んだ。

四國と九州

四國では、管領家の一族に當る細川氏の勢力が衰へると、土佐から起つた長曾我部元親がその大部分を從へた。九

戰國諸雄の風格

州には、少貳氏の家臣龍造寺氏が主家に代つて肥前に起り、豐後の大友氏は、明及びあらたに來航した西洋人と貿易して富强を增した。しかし、やがて薩摩の島津義久がしだいにこれら諸族をおさへて、ほとんど九州を併せようとする勢を示すに至つた。

かうして、應仁の亂後、約百年、戰は全國に波及し、干戈の絶間とてなかつたのであるが、時のたつにつれて、しだいに秩序も回復されていつた。戰國の諸雄も、たゞ徒らに戰を事としてゐたわけでなく、豪傑といはれ、英雄と呼ばれるほどのものは、上皇室に心を寄せ奉つて忠勤を勵むと共に、民政に意を留めて人心を安んじ、貿易を營んで富强をはかるなど、着々としてその領地を固め、更にその大をはからうとし

たのであつた。特に、北條氏や武田氏の民政、大内氏の富強など最も世に著れ、北條氏の城下小田原と大内氏の城下山口は、さびれた京都に代つて東西に盛況をうたはれた。また戰國の諸雄は、單なる一介の武人ではなかつた。智謀にたけ、戰術に長ずると共に、戈を横たへて詩を賦

上杉謙信秋夜詩を吟ず

國民がしきりに海外に渡る

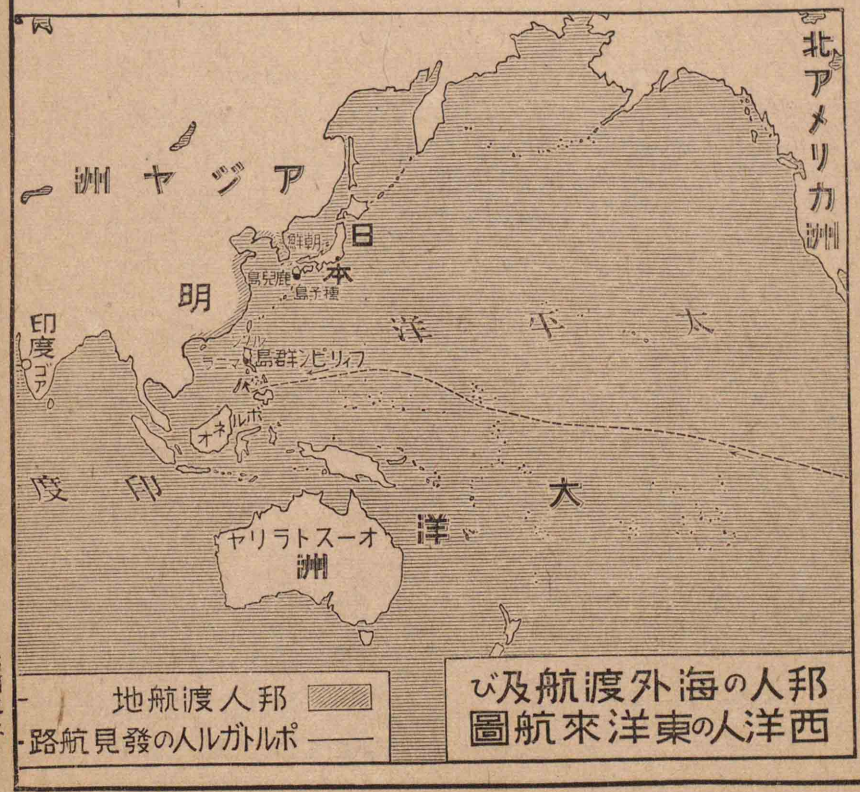
するの文才あるものも少くはなかつた。特に、上杉謙信や江戸城を築いた太田道灌は文名が高く、謙信が能登攻略の陣中で作つた詩の如きは、あまねく世に知られてゐる。更に、心身の鍛錬に心がけて部下を導き、部下との親和をはかつて家風を興した諸雄も少くはなく、その家訓には學ぶべきところが多い。

かうした諸雄によつて、騷亂の世は幾多の軍物語をとゞめながら、しだいに統一へと向かつた。

第三十一　邦人の海外渡航と西洋人の渡來

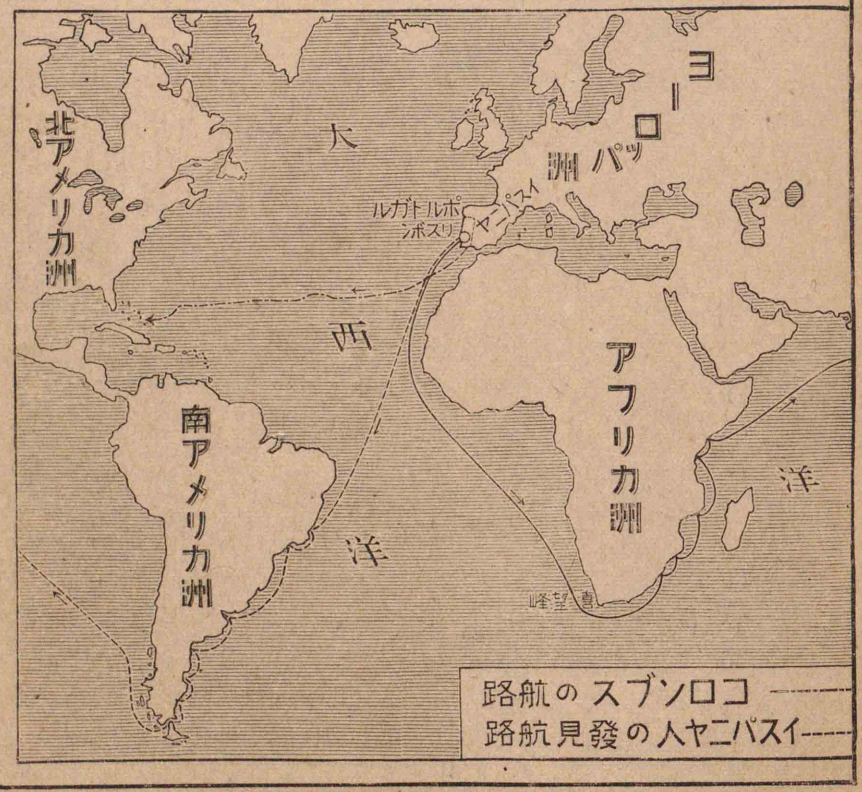
戰國時代には、人々が實力を競つたので、國民の元氣が、國内にみなぎつたばかりでなく、更に海外にあふれた。わが

西南の地方は、特に海運の便利がよいので、海事思想が發達して、早くから海外に交通するものがあつた。九州及び瀬戸内海附近の住民のうちには、黨を結んで支那・朝鮮に渡り、專ら商利を求め、それが聽かれないと、たゞちに武



邦人の海外渡航及び西洋人の東洋來航圖

力を振るふものが少くなかつた。明及び高麗は、大いにこれを恐れ、たびたび書を足利義滿に送つて、これを禁ずることを願ひ出たので、義滿は一時それらの徒を取締つた。しかし、應仁の亂後、室町幕府が衰へると、その徒の勢



力は再び盛になり、軍船をそろへ、八幡大菩薩と書いた旗をおし立てて彼の地に渡つた。かうして、わが國民の冒險心は、おのづから振るひ起され、中には、遠洋に航海を試みるものさへあらはれるやうになつた。

西洋人が東洋に航路を開く

この頃、西洋でも航海術が大いに進み、航路を東洋に開かうとする形勢となつた。イタリヤ人コロンブスは、マルコ、ポーロの著書を見、わが國の金銀及び産物に富むことを知つて、來航を企て、イスパニヤ女王の助力により、大西洋を西へ横ぎつて、思ひがけなくアメリカを發見した。その後まもなく、ポルトガル人はアフリカの南端を廻航して、はじめて印度に達した。

ポルトガル人がはじめて小銃を傳へる

以來、西洋人の東洋に來航するものが、おひ〳〵多くなつた。中にも、ポルトガル人は、率先して來り、印度の西岸にあるゴアを占領し、こゝを根據として、盛に商業に從事した。彼等がたび〳〵支那に往來するうちに、たま〳〵紀元二千二百三年、後奈良天皇の天文十二年に、その商船が暴風にあつて、大隅の種子島に漂着した。實に西洋人がわが國に渡來した始である。この時、小銃がはじめて傳はり、世に種子島と呼ばれて、大いに武人に珍重せられ、忽ち四方にひろまつた。この影響を受けて、戰術は一變し、築城法なども、面目を改めるに至つた。

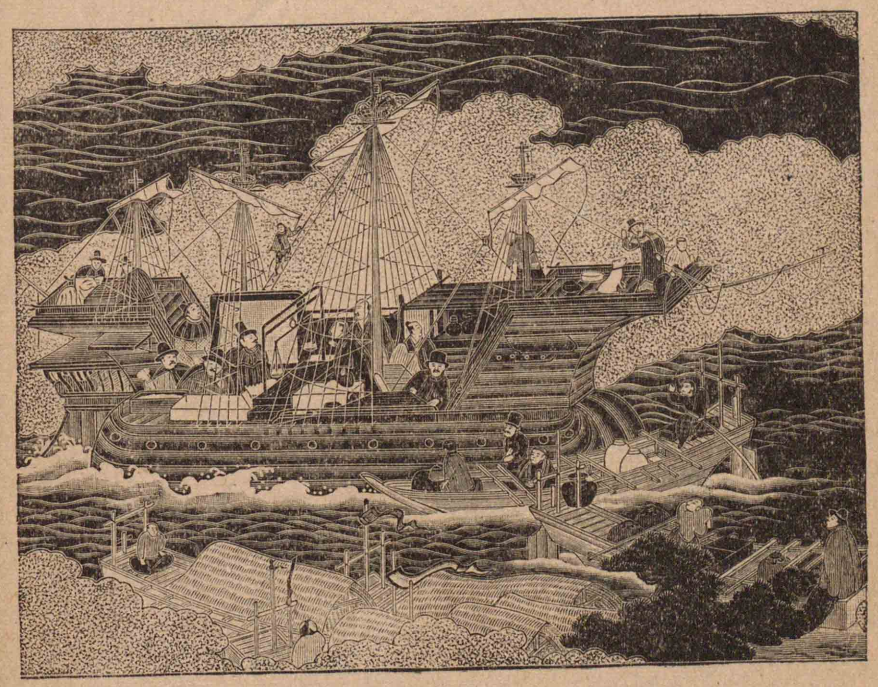
イスパニヤ人の來航

イスパニヤ人もまた、コロンブスのアメリカ發見以來、しきりに新大陸の經營に從つたが、後には、太平洋を航海して東洋に來た。さうして、フィリピン群島を取つて、ルソンのマ

キリスト教が傳はる

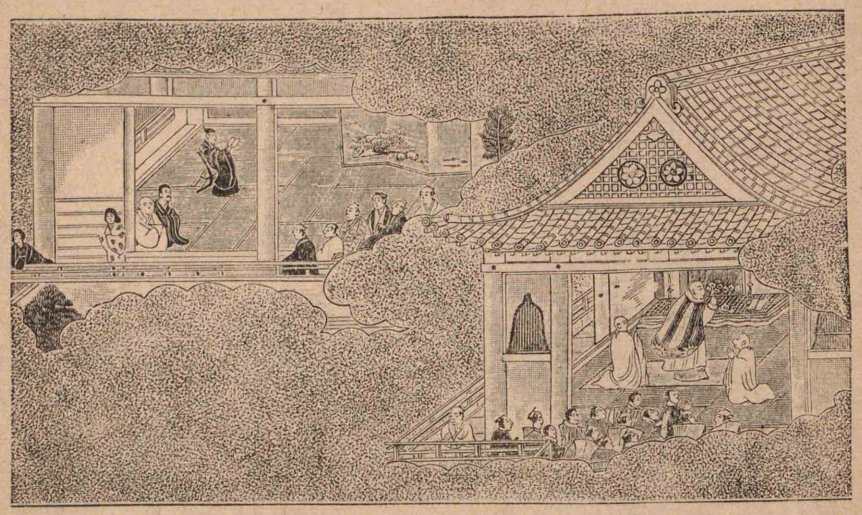
ニラを根據地とし、ポルトガル人についでわが國に來航した。

この頃、イスパニヤ人ザビエルといふ人が、印度でキリスト教の一派を宣傳してをつたが、遂に天文十八年、鹿兒島に來てはじめてその教を傳へ、更に諸國を廻つてこれをひろめた。キリス



南蠻船

天主教



南蠻寺

ト教は、わが垂仁天皇の頃、キリストによつてはじめられた宗教で、古くから西洋に行はれたものである。大内・大友らをはじめ、諸大名の信仰を得、教會堂や學校などが所所に設けられ、それと共に、西洋の文物がしだいに諸國にひろまる糸口を開いた。當時、わが國では、これらの外人をすべて南蠻人と呼び、その宗教を切支丹宗または天主

教（けう）といつた。さうして天主教は、信長の天下統一の事業が進むにつれ、その保護を受けていつそう廣く傳播（でんぱ）するに至つた。

終

年表

御代數	天皇	紀元	年	號	摘要
一	神武天皇	元	元	年	卽位の禮を擧げ皇后をお立てになる
	同	二	二	年	功臣を賞せられる
	同	四	四	年	鳥見の山中で皇祖をお祭りになる
一〇	崇神天皇	五六九	六	年	天照大神を新宮にまつらせ給ふ
	同	五七三	十	年	將軍を四道にお遣はしになる
	同	五七五	十二	年	人口を調べてみつぎものを納めさせられる
	同	五八〇	十七	年	諸國に船をお造らせになる
	同	六二五	六十二	年	池や溝をお開かせになる
	同	未詳	未	詳	將軍を任那に遣はして鎭めさせ給ふ
一一	垂仁天皇	六五六	二十五	年	天照大神を伊勢に遷しまつらしめ給ふ
	同	六六六	三十五	年	諸國に命じて池や溝を開かせ給ふ
一二	景行天皇	七四二	十二	年	熊襲を御征伐になる
	同	七五五	二十五	年	武内宿禰に東北地方の樣子を調べさせ給ふ

一二	景行天皇	七五七	二十七年	日本武尊に熊襲を平げさせ給ふ
同		七七〇	四十年	日本武尊に蝦夷を鎮めさせ給ふ
一三	成務天皇	七九三	三年	武内宿禰を大臣とし給ふ
同		七九五	五年	山川によつて國・縣をお分ちになる
一四	仲哀天皇	八六〇	九年	神功皇后が新羅をお討ちになる
一五	應神天皇	九四三	八十三年	弓月君が歸化する
同		九四五	八十五年	王仁が論語などを奉る
同		九四九	八十九年	阿知使主が歸化する
同		九五七	九十七年	菟道稚郎子が高麗の書の無禮を責められる
同		九六六	百六年	阿知使主を支那にやつて織縫の女工を求めさせられる
二一	雄略天皇	一一二二	六年	皇后が蠶をかはせ給ふ
同		一一二三	七年	錦織の職工及び陶工・畫工などが百濟から來る
同		一一二八	十二年	使を支那にやつて織縫の女工を召させられる
同		一一三八	二十二年	豐受大神を伊勢におまつりになる
二九	欽明天皇	一二一二	十三年	百濟王が佛像や經文を奉る

同		一二二二	二十三年	新羅が任那を滅す
三一	用明天皇	一二四七	二年	蘇我馬子が物部守屋を滅す
三二	崇峻天皇	一二四九	二年	(隋が支那を統一する)
三三	推古天皇	一二五三	元年	聖德太子が四天王寺を建立し給ふ
同		一二六三	十一年	太子が冠位の制を定められる
同		一二六四	十二年	太子が十七條の憲法を作り給ふ
同		一二六七	十五年	太子が小野妹子を隋に遣はし給ふ○太子が法隆寺を建立し給ふ
同		一二六八	十六年	妹子が隋使をともなつて歸朝する○妹子が留學生を從へて再び隋におもむく
同		一二七〇	十八年	高麗の僧曇徵が來る
同		一二七八	二十六年	(隋が亡び唐が起る)
三四	舒明天皇	一二九〇	二年	使を唐に遣はし給ふ
三五	皇極天皇	一三〇五	四年	蘇我蝦夷・入鹿父子が誅せられる
三六	孝德天皇	同	大化元年	はじめて年號を立てられる
同		一三〇六	二年	私有の土地・人民を收めて田地をわかち授け租・庸・調の制を定め給ふ
三七	齊明天皇	一三一八	四年	阿倍比羅夫が蝦夷を討つ

三七	齊明天皇	一三一九	五年
同	同	一三二〇	六年
三八	天智天皇	一三二三	二年
同	同	一三二五	四年
同	同	一三二七	六年
同	同	一三二八	七年
四二	文武天皇	一三六一	大寶元年
四三	元明天皇	一三六八	和銅元年
同	同	一三七〇	三年
同	同	一三七二	五年
同	同	一三七三	六年
四四	元正天皇	一三八〇	養老四年
四五	聖武天皇	一三八九	天平元年
同	同	一四〇一	同 十三年
同	同	一四〇七	同 十九年
四六	孝謙天皇	一四一四	天平勝寶六年
四八	稱德天皇	一四二九	神護景雲三年

比羅夫が再び蝦夷を討つ
比羅夫が三たび蝦夷を討つ
(百濟が亡びる)
唐の使が來朝する
都を大津に遷し給ふ
藤原鎌足に法令を定めさせられる○(高麗が亡びる)
大寶律令が出來上る
はじめて錢を鑄させられる
都を奈良にさだめ給ふ
古事記が出來る
諸國に命じて風土記をお作らせになる
日本書紀が出來る
藤原光明子を皇后にお立てになる
國毎に僧尼の兩國分寺をお造らせになる
東大寺の大佛を鑄させられる
唐僧鑑眞が來朝する
和氣清麻呂が道鏡をくじく

四九	光仁天皇	一四三〇	寶龜元年
五〇	桓武天皇	一四四八	延曆七年
同	同	一四五七	十六年
同	同	一四五四	十三年
同	同	一四六二	二十一年
同	同	一四六四	二十三年
同	同	一四六五	二十四年
五一	平城天皇	一四六六	大同元年
五二	嵯峨天皇	一四七六	弘仁七年
同	同	一四八一	同 十二年
五五	文德天皇	一五一七	天安元年
五六	清和天皇	一五一八	同 二年
五九	宇多天皇	一五四七	仁和三年
同	同	一五五四	寬平六年
六〇	醍醐天皇	一五六一	延喜元年
同	同	一五六五	同 五年
同	同	一五六七	同 七年
六一	朱雀天皇	一五九五	承平五年

道鏡をおとし清麻呂を召しかへし給ふ
最澄が比叡山に延曆寺を建立する
都を今の京都にさだめ給ふ
坂上田村麻呂を征夷大將軍とし給ふ
膽澤城を築かせられる
最澄空海が唐におもむく
最澄が歸朝して天台宗を開く
空海が歸朝して眞言宗を開く
空海が高野山に金剛峰寺を建立する
藤原冬嗣が勸學院を建てる
藤原良房を太政大臣に任じ給ふ
良房を攝政とし給ふ
藤原基經を關白とし給ふ
遣唐使の派遣をとゞめられる
菅原道眞が太宰府に遷される
古今和歌集が出來る
(唐が亡びる)
(新羅が亡び翌年高麗が半島を統一する)

六一	朱雀天皇	一六〇〇	天慶三年
同		一六〇一	同 四年
六四	圓融天皇	一六三九	天元二年
六八	後一條天皇	一六八二	治安二年
同		一六九一	長元四年
七〇	後冷泉天皇	一七一三	天喜元年
同		一七二二	康平五年
七一	後三條天皇	一七二九	延久元年
七三	堀河天皇	一七四六	應德三年
同		一七四七	寛治元年
七五	崇德天皇	一七八九	大治四年
七七	後白河天皇	一八一六	保元元年
七八	二條天皇	一八一九	平治元年
七九	六條天皇	一八二七	仁安二年
八〇	高倉天皇	一八三五	安元元年
八一	安德天皇	一八四〇	治承四年

平貞盛らが平將門を誅する
源經基らが藤原純友を誅する
(宋が支那を統一する)
藤原道長が法成寺を建てる
源頼信が平忠常を降す
藤原頼通が平等院に鳳凰堂を建てる
源頼義が安倍貞任らを滅す
記錄所を設け給ふ
白河上皇が政を院中でお聽きになる
源義家が清原武衡らを滅す
平忠盛に山陽・南海の海賊を捕らへさせられる
保元の亂
平治の亂
平清盛を太政大臣に任じ給ふ
法然が淨土宗を開く
清盛が兵庫港の修築を企てる○源頼政が平氏を滅さうとする○源頼朝が兵を擧げる○

同		一八四三	壽永二年
同		一八四四	同 三年
八二	後鳥羽天皇		
同		一八四五	同 四年
同		一八四九	同 五年
同		一八五一	建久二年
同		一八五二	同 三年
八三	土御門天皇	一八六五	元久二年
八四	順德天皇	一八七九	承久元年
八五	仲恭天皇	一八八一	同 三年
八六	後堀河天皇	一八八四	元仁元年
同		一八八七	安貞元年
同		一八九二	貞永元年
八九	後深草天皇	一八九〇九	建長元年
同		一九一三	同 五年
九〇	龜山天皇	一九二八	文永五年

頼朝が侍所を鎌倉に開く
平宗盛が西に走る
源義仲が誅せられる○頼朝が政所・問注所を鎌倉に設ける
平氏が亡びる
守護・地頭を置くことをお許しになる
頼朝が藤原泰衡を滅す
榮西が歸朝して臨濟宗を傳へる
頼朝が征夷大將軍に任ぜられる
新古今和歌集が出來る
源實朝が害せられる
承久の變
親鸞が眞宗を開く
道元が歸朝して曹洞宗を傳へる
北條泰時が貞永式目を定める
北條時頼が建長寺を鎌倉に建てる
日蓮が日蓮宗を開く
蒙古の使が來る

九一	後宇多天皇	一九三四	文永十一年
同	同	一九三九	弘安二年
同	同	一九四一	同 四年
九二	伏見天皇	一九四二	同 五年
九六	後醍醐天皇	一九五一	正應四年
		一九八一	元亨元年
同		一九九一	元弘元年
同		一九九三	同 三年
同		一九九四	建武元年
同		一九九五	同 二年
九七	後村上天皇	一九九六	延元元年
		一九九九	延元四年
同		二〇〇八	正平三年
同		二〇〇九	同 四年
九八	長慶天皇	二〇二八	同 二十三年
同		二〇四三	弘和三年

文永の役
(元が宋を滅す)
弘安の役
北條時宗が圓覺寺を鎌倉に建立する
亀山上皇が南禪寺を京都にお建てになる
院政がやんで天皇が御みづから政をお執りになる
北條氏をお討たせになる
北條氏が亡び鎌倉幕府がたふれる
政治を改新し給ふ
足利尊氏が鎌倉で反く
吉野に行幸し給ふ
尊氏・直義が天龍寺及び諸國の安國寺を建てる
賀名生に行幸し給ふ
尊氏が基氏を關東管領とする
(元が亡び明が起る)
足利義滿が相國寺を京都に建立する

九九	後龜山天皇	二〇五二	元中九年
一〇〇	後小松天皇	二〇五七	應永四年
同		二〇五八	同 五年
同		二〇六一	同 八年
一〇一	稱光天皇	二〇七九	同 二十六年
一〇二	後花園天皇	二〇九二	永享四年
同		二〇九九	同 十一年
同		二一〇一	嘉吉元年
同		二一一七	長祿元年
一〇三	後土御門天皇	二一二七	應仁元年
同		二一三七	文明九年
同		二一四三	同 十五年
同		二一五一	延德三年
同		二一五二	明應元年
一〇五	後奈良天皇	二一五八	同 七年
		二二〇三	天文十二年

(高麗が亡び朝鮮が起る)○京都に還幸して御位を後小松天皇に讓り給ふ
義滿が金閣を北山に造る
義滿が幕府の職制を定める
義滿が好を明に通ずる
將軍義持が明と好を絶つ
將軍義教が再び明と好を修める
關東管領が亡びる
赤松滿祐が義教を害する
太田道灌が江戸城を築く
應仁の亂が起る
應仁の亂がやむ
義政が銀閣を東山に造る
北條早雲が伊豆に據る
(イタリヤ人コロンブスがアメリカを發見する)
(ポルトガル人が海路印度に達する)
ポルトガル人が種子島に漂着して小銃を傳

一〇五	後奈良天皇	二二〇六	天文十五年	川越の戰
同	同	二二〇九	同十八年	ザビエルが鹿兒島に來て天主教を傳へる
同	同	二二一五	弘治元年	嚴島の戰
一〇六	正親町天皇	二二二〇	永祿三年	桶狹間の戰
同	同	二二二一	同四年	川中島の戰
同		二二二五	同八年	將軍義輝が害せられ弟義昭が走る○(イスパニヤ人がフィリピン群島を取る)
同	同	二二二八	同十一年	織田信長が義昭を奉じて入京する
同	同	二二三二	元龜三年	三方原の戰
同	同	二二三三	天正元年	義昭が追はれて足利幕府が亡びる

昭和十五年三月十四日印刷
昭和十五年三月十六日發行
昭和十五年三月十八日翻刻印刷
昭和十五年四月二日翻刻發行

高等小學國史上卷
(停)臨時定價 金拾九錢

昭和十五年三月十九日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　石川正作

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
印刷所　東京書籍株式會社工場

發行所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

広島大学図書
2500029790